

岡田温と四阪島煙害問題

川 東 蛸 弘

目 次

はじめに

第1章 岡田温について

1. 誕生・少年・青年時代
2. 帝国大学農科大学農学科乙科時代・農事会本部時代
3. 温泉郡農会技師時代

第2章 岡田温と四阪島煙害問題

1. 愛媛県農会技師活動
2. 温と四阪島煙害問題

おわりに

は じ め に

帝国農会幹事・岡田温（おかだ ゆたか、1870年～1949年）について研究を続けている（『帝国農会幹事 岡田温日記』第1巻～3巻、松山大学総合研究所所報、第49、50、53号、松山大学総合研究所、2006、2007年）。

今回はその一端、愛媛県農会技師時代に温が尽力した住友四阪島精錬所の煙害問題についてファクトファインディングと思われる点、ならびに研究上の問題について考察する。

住友四阪島精錬所は明治37年（1904）8月に一部竣工し、試験操業を始め、翌38年1月から本格的に操業し、東予4郡（越智、周桑、新居、宇摩郡）に煙害をもたらした。以降、東予の被害農民を中心に長年にわたる激しい煙害反対運動が展開され、43年11月、妥協的解決がなされた。その煙害反対運動を

支えたのが、38年5月15日、愛媛県農会技師に就任した岡田温であった。これまでの研究史で、温が明治39年11月『煙害調査書』をまとめ、東予の農作物への被害が住友四阪島の煙害であることを論証し、煙害反対運動を理論的に支えた点は高く評価されてきたが、今回研究を進めるなかで、温の役割は単にそれだけにとどまるものではないことが判明した。明治40年9月の「愛媛県鉍毒調査会」の報告書の執筆、41年7月の周桑郡町村長の農商務大臣あての建議案の執筆、41年9月愛媛県選出代議士への現地視察の要請、41年12月愛媛県会での「煙害救済ノ議」の決議案の執筆、42年1月の第25帝国議会における煙害救済の建議案の執筆、その参考資料の『煙害調査要項』の執筆、42年4月尾道会談における被害農民側の損害賠償額の算定、42年12月の愛媛県会での再度の煙害救済決議案の執筆、43年1月の第26帝国議会における煙害救済の再度の建議案の執筆、43年10月農商務省官邸での住友との煙害賠償契約協議会における被害額の算定等々、それらすべて温が執筆したり、関与したものであった。煙害反対運動の主体はもちろん東予の被害農民であり、その代表の町村長たちであったが、それを理論、政策、実務面から支えたのが、温であり、被害農民や町村長たちは温を頼りにした。

四阪島の煙害問題は、明治43年11月、伊沢多喜男愛媛県知事と大浦兼武農商務大臣との裁定により、賠償金支払い（明治38年～40年10万円、41年～43年23万9,000円、44年～46年は23万1,000円）、鉍量制限（1ヵ年5,500万貫、米麦作の重要時期各40日間は1日の鉍量10万貫、10日間は休止）、3年ごとの契約更新などで妥協的に解決した。

その妥協、裁定をどう評価するかである。妥協だから双方に不満が残ったことは言うまでもない。被害農民側は賠償金額で大いなる不満が残った。住友には鉍量制限で大いなる不満が残った。双方痛み分けと見ることが一応出来る。当事者の一色耕平（周桑郡代表・壬生川町長）は「妥協成立、一段落となる」¹⁾

1) 一色耕平『愛媛県東予煙害史』周桑郡煙害調査会、大正15年、194頁。

との評価であり、また、煙害反対運動を支えた岡田温は「鉋主も被害者も共に不利不満…両損両敗」²⁾とみなしている。従来の研究史でも、妥協的解決といった評価である³⁾。しかし、一步踏み込んで、どちらがより多く譲歩を強いられたかを深く追求する点が欠けていたように思う。

賠償金額にかんし、被害農民側は大幅な譲歩を余儀なくされた。明治38年～43年の既往6年間は、被害者の最低限の要求額の半分以下であった。そのうち、特に明治38年から40年の3ヵ年間はわずか10万円にすぎなかった。岡田温の『四阪島煙害調査要項』の計算による米麦の損害額は、明治38年が22.8万円、39年が32.2万円、40年が34.7万円で、約90万円であったので、その隔たりは余りにも大きい。

鉋量制限にかんし、住友側は、「過重の負担」「操業上苛烈なる桎梏」などと大いに不満を述べているものの⁴⁾、四阪島精錬所の明治38年以降の焼鉋量の実績を見ると、38年2,621万貫、39年4,184万貫、40年4,751万貫、42年5,348万貫、43年で5,300万貫⁵⁾で、いずれも5,500万貫以内にとどまっている。伊沢知事は鉋量削減までは裁定しなかったのである。

なぜ、被害農民側は大幅な譲歩を強いられたのか。それは、被害農民側の代表・町村長側が、住友との煙害賠償契約妥協会にあたって、住友側と意見の一致が出来ない場合、農商務大臣や伊沢の裁定を仰ぎ、その裁定に「異議ヲ唱ヘザルコト」をはじめから誓約させられていたことに原因があったためだと思う。それは、伊沢の巧緻な戦略であり、それに町村長側が乗せられた結果ではないだろうか。

また、賠償金の支出に関する研究史上の評価である。伊沢知事は、賠償金を農民個人に配分せず、農事改良費に充用するとし、おおむねそのように支出さ

2) 岡田温「四阪島煙害被害者諸君に望む」『愛媛県農会報』107号、明治44年2月。

3) 菅井益郎「別子銅山煙害事件」『社会科学研究』第29巻第3号、1977年。清水みゆき『近代日本の反公害運動史論』日本経済評論社、1995年。

4) 住友本社『別子開坑二百五十年史話』昭和16年、476頁。

5) 一色耕平『愛媛県東予煙害史』大正15年、182頁。

れた。それを高く評価しているのが、公害研究の第一人者・宮本憲一氏である。氏は「この地域の農民の運動は、きわめて水準の高いものでした。先の生産制限という方法をとったことにあらわれていますが、なによりも驚くべきことは、賠償金や寄付金を個人に分配せず、すべて地域の公共施設や農事改良にあてたということです。彼らは日本最初の被害者の立場で書いた住民運動史と思われる大部の『愛媛県東予煙害史』（1926年）を出版し、今後こういう公害が二度と起こらないようにと後世の人民に警鐘をならしています。1910年から1939年までの賠償金および寄付金は848万円（現在の貨幣価値になおしにくいですが、500～800億円ぐらいの価値になるであろう）、これによって中学校、3つの農学校、実業学校、女学校、種畜場、農会事務所などの建設と管理の費用がまかなわれたのです。戦後の公害裁判では、イタイイタイ病原告のように、賠償金をもとに清流会館をたて、ここを拠点にいまなお公害防止の活動を続けている立派な人たちがいます。しかし、一部では賠償金をまったく個人の利益に使い、中にはそれをムダに使いはたして困窮している人もいます。それに比べるとこの愛媛県の農民は、巨額の賠償金を一銭も私にせず公益のために使ったのです。その志の高さには頭が下がります」⁶⁾

国内および世界の公害研究と被害住民の立場に立って運動に従事された闘う研究者・宮本憲一氏の見解は傾聴に値するものであるが、住友四阪島の煙害問題の解決に関してはやや一面的で評価のしすぎではないだろうか。住友の賠償金は、県および町村の財政に入り、農事改良、学校建設などのインフラに支出され、長期的には被害農民に役立ったことは事実である。しかし、個人にビタ一文も賠償がなされなかったことは、長年にわたる煙害を受けた農民の農産物被害額や健康被害、生活苦、感情などからみると、ここまで評価するのはやはり問題があろう。実際被害地数ヵ村より賠償金の個人分配について要求があったが、県により拒否され、それを煙害問題のリーダーたち（町村長）が受け入

6) 宮本憲一『環境と開発』岩波書店、1992年、133頁。

れた⁷⁾。賠償金を個人に分配せず、農事改良費にあてるとするのは、調停者伊沢知事の強い意向であったが、その巧緻な戦略に町村長側は乗せられ、受け入れた。それは、町村長側としては、財政が潤い、それで農業・農民のために行政を行うことが出来るからと思ったのではないか。一色耕平（壬生川町長）にせよ、曾我部右吉（桜井村長）にせよ、確かに、被害農民の立場に立ち、有能なリーダーであったが、やはり、町村長であり、知事には逆らえなかった。そこに運動の限界があったように思う。なお、伊沢は四阪島煙害問題の解決を「生涯快心の作である」と自画自賛していた⁸⁾。

本稿では、第1章で岡田温の簡単な経歴を紹介し、第2章で四阪島煙害反対運動における温の役割について考察することにする。

第1章 岡田温について

1. 誕生・少年・青年時代

岡田温は明治3年（1870）6月20日、久米郡南土居村（後、温泉郡石井村、現松山市土居町）、父岡田為十郎、母ヨシの8人兄弟の長男として生まれた。幼名は新太郎である（25年12月に温と改名）。

岡田家の家業は農業。土地所有規模は4町足らずで、下男下女や常雇を使った耕作地主であった。温は、幼少時から小地主の長男として育てられた。小学校の入学、卒業年月不明だが、おそらく明治10年4月に石井尋常小学校に入学し、18年3月に高等小学校を卒業したと思われる。

温の少年時代、明治10年代は、松方デフレもあり、岡田本家の経済状態は良いとはいえなかった。温が岡田文庫に残した文章「私の略歴」（昭和21年ごろの執筆と思われる）に「我家ノコト遠キ昔ハ知ラザレドモ近キ数世ノ間ハ代々村方ノ役儀ナド務メ曾祖父及祖父ハ久米郡ノ巡察ニ挙ケラレ、父君ハ石井村長

7) 愛媛県経済部農務課『愛媛県東予地方ニ於ケル別子銅山煙害問題ノ経過』（以後、『経過』と略）、昭和12年、144頁。

8) 伊沢多喜男伝記編纂委員会『伊沢多喜男』昭和26年、93頁。

ニ推サレナド村内ニテハ上級農家ノ地位ニ在リシカ如シ。經濟上ノ事ハ時ニ隆替ハアリシナルヘキモ、総シテ甚シキ浮沈ナクシテ、父君ニマデ伝ハリシ趣キナリシモ、父君ノ世ニ至リテ、余ノ記憶セル者ニテモ、義朗ノ叔父分家物入以来、屢盜難ニ逢ヒ家族婢僕ニ至ルマデ悪疫ニ罹リタル等ノ不幸引続キ、加フルニ麻生村仙波家瓦解ノ為メ一時ニ三人ノ子供ヲ引取り、母上ノ手ニテ育成セラレ、其レ々々方付ノ済ミタル頃、又モヤ分家岡田直吉ノ家ノ瓦解アリ。種々迷惑ノカ、リタル上、一人ノ子供ヲ引取り、多年ノ間世話ヲナシタルナド是等ハ縁家ノ義務ナルモ我家ノ經濟上ニハ一ノ不幸ナリ」⁹⁾とある。文中、叔父・義朗(温の母・ヨシの弟で、長男)の分家は明治13年(1880)であり、親戚の仙波家や岡田直吉家の瓦解などは、おそらく14年以降の松方デフレ・農村不況のためであろう。

温は、小学校卒業後、実家の農業を手伝いながら、南土居から松山町内の漢学塾、三輪田真佐子¹⁰⁾の私塾明倫学舎に通い、漢学を学んだ。三輪田真佐子は明治12年から20年まで松山町で塾を開講していたので、おそらく20年まで漢学を学んだであろう(昭和2年5月3日の岡田日記にその旨の記事がある)。

明治20年(1887)以後、温は父為十郎の指揮の下で、下男や常雇を使い、自作農業を営んでいた。だが、父は、23年6月から石井村会議員に就任し、また、25年8月からは石井村長に就任したため(～28年5月)、実家の農業は温が中心となり、営むようになった。前出の「私の略歴」にも、「その頃は父が中心で2人の下男と1人の女中と3人の常雇で2町余りを耕作していたので、私も父や下男とともに働かされた。その間、父が村長に選ばれ、農業を指揮することが出来なくなり、私は父の指図を受けて作業計画等の指揮役を務めることになり、この間に実地の修業が出来た」¹¹⁾とある。

9) 岡田温「私の略歴」その1(岡田文庫所収)。

10) 天保14年(1843)宇田淵の1人娘として京都に生まれる。幼いときから漢学を学ぶ。明治2年、松山藩士で、勤皇の国学者三輪田元綱と結婚。12年元綱が死亡し、松山にて、私塾明倫学舎を開講。20年上京し、神田に私塾翠松学舎を開講。35年三輪田高等女学校を開設し、校長となる。昭和2年死亡(『愛媛県史』人物より)。

温は明治25年(1892)には松山市内に下宿していた。そして、5月から2ヶ月ほど中国から九州を漫遊している。なぜ、この時、松山市に下宿していたかは不明であるが、おそらく、愛媛尋常師範学校の聴講のためであると思われる。それは、明治27年の尋常師範学校教諭山口沢之助の口述ノートが岡田文庫にあり、そこに温が「第十三回講習生 岡田温」と記しているからである。

その間の、明治26年(1893)3月13日、温は石井村大字北土居の越智喜作の長女・テル(明治6年8月1日生まれ、19歳)と結婚した。温22歳の時である。なお、テルと温とは従兄弟どうしであった(温の父・為十郎はテルの父・越智喜作の実弟)。

明治28年(1895)2月、教育者として名高い渡部明綱から教員就任の要請を受け、3月11日から斎院尋常小学校に赴任した。斎院小学校は実家からは遠かったので、松山市新玉の弟宅(安長宏太郎宅。宏太郎は温の弟で、松山市の安長キヨの養子になっていた)に下宿し、通った。6月10日からは郡役所の配慮と思われるが、石井尋常小学校へ転任し、自宅から通った。月給3円であった。当時、県庁の職員がおよそ7円から10円ぐらいであったので、嘱託教員であったと思われる。

明治28年3月21日には、長女・清香が誕生している。

岡田家の土地所有規模は、明治28年11月時点で3町6反9畝9歩であった。

2. 帝国大学農科大学農学科乙科時代・農事会本部時代

温は思う所があって、1年足らずで教員を辞め、明治29年(1896)2月23日、妻子を残し、勉学のために上京した。この時25歳であった。その理由について、前掲の「私の略歴」によると、「余ハ明治二十五年越智氏ノ二女ト結婚シ、一旦家事向万端ノ世話ヲナシ居リタルモ、社会文明ノ未来ヲ想像シテハ種々ノ希望抑ヘ難ク、竟ニ二十八年ニ至リ、断然意ヲ決シテ再び家事ノコトヲ

11) 岡田温「私の略歴」その2。

父上ニ託シ、二十九年二月東京ニ遊学ヲナシツル」¹²⁾とある。子供を東京に出すためには、お金が要る。岡田家はこの時、土地を9反19歩を660円で売却した。そのため、岡田家の土地所有は2町7反余りに減少した。

温は、明治29年7月1日～3日、帝国大学農科大学農学科乙科（実業者養成）の入学試験を受け、合格し、7月16日仮入学し、その後の実習にも合格した。そして、9月11日入学した。以後、3年間、斎藤万吉、玉利喜造、横井時敬らに学び、実習に励み、また、同窓会組織である講農会幹事にも就任し、「講農会報」の編纂に携わった。また、大学改革運動にも取り組んだ。

明治32年（1899）7月13日、温は卒業した。この日の日記に「乙科実科卒業証書授与式。学長ノ祝辞、田中、河瀬、原教授ノ演舌アリ。実科総代トシテ染谷君、乙科総代トシテ宮本君答辞ヲナス。農科ノ名誉ト云フベシ。式終リテ三科共ニ図書館前ニテ撮影セリ。丸木。同窓一撮シテ解散ス。顧レバ二十九年ノ七月初メテ第二寄宿舎ニテ相見テ以来、蛍雪ヲ共ニスル満三年。今ハ昨夢ノ如シ」とある。

温は卒業とともに、恩師の玉利喜造教授の勧めにより、明治32年8月1日（全国）農事会本部に就職した。その間の事情を前掲「私の略歴」から引用すると、「私は明治29年に駒場の農科大学農学部乙科に入学し、同32年に卒業した。この在学中の30年から31年頃が、農業界の大発展の出発期であった。各府県が一時に農学校、農事試験場、農会等を設立したので、遽かに教師や技術者の需要が増した。私等の3年の時は、卒業者の2倍以上の申込があった。私は級の幹事をしていたので、就職に関する世話役を勤めたが、在学中に全部予約済となり、中には一旦約束をしたものが、更によい条件で要望されたり、郷里から強要されたりして在学中の転任といったやうなこともあった。私は今、2、3年東京で勉強したいと考へ、何処へも就職しなかったのであるが、或日、玉利先生（主席教授で私等の園芸の先生）に呼はれ、君は何処へ就職す

12) 岡田温「私の略歴」その1。

るのかと問はれたから、2、3年東京で勉強する考えですと答えたところ、更に続いて学資を送って貰ふのかと言はれたから、その積もりですといったら、先生はそれはいかん、卒業して後まで親から金を送って貰ふやうなことはいかん、それにはよい問題がある。農業界にも多年の要望が実現して漸く諸機関が揃ふたが、今後は農会で働くのが一番面白い。本年は農会法が制定せられ、法律によって府県郡市町村と系統農会が組織され、中央には全国農事会といふ、府県農会を統制し指導する農会が出来て、専任職員を置くことになったから、此处へ来い、月給は25円位しか出せないが、勉強出来るといはれたから、早速お願いして全国農事会に就任した。これが私の昭和11年まで40年の公生涯を農会に終始した因縁である」¹³⁾と。

明治32年(1899)8月1日より、温は農事会本部に出勤し、玉利先生の指導の下で農事会運動に従事した。そして、農事会の月刊雑誌「中央農事報」の編集に従事した。また、選挙法「改正」反対運動などにも取り組んだ。農事会時代のことについて、温は前掲「私の略歴」の中で、「全国農事会は幹事制で、玉利先生が幹事長で会務一切を指導された。幹事は酒匂常明、池田謙蔵、樋田魯一、渡瀬寅二郎など農業界の元老であった。常務は私と上領浦治といふ書記と2人でその他は兼任者であった。明治33年4月から、中央農事報といふ機関雑誌を発行することになり、私が編集事務を担当した。私は在学中、講農会報といふ同窓の機関雑誌(隔月発行)の編集係を1学年から卒業までやられたので、幾らかの経験はあったが、月刊雑誌の編集事務の責任者となると、毎月2、3回は徹夜をするやうな多忙な苦しいこともあったが、非常に勉強になった」¹⁴⁾と述べている。

なお、唐突だが、明治32年8月28日、妻のテルと離婚している。

明治32年の年末、温は故郷に帰らず、東京で大晦日を送った。その歳暮の感では、自分に最も適した職業に従事でき、また、両親に感謝している。「今

13) 岡田温「私の略歴」その2。

14) 岡田温「私の略歴」その3。

年此歳暮はこれまでになき気楽なる年のくれなり。想ふに卒業後少しもまごつかずして、おのれに最も適したる又最も好む業務に携はり、日々の公務に毫も不平なきは、我同窓中恐らく余の外に多くはあるまじ。常々転々強申万事なかりし。借金もおほかた拂ひ、日頃愛顧せらるゝ人々には各相当の進物も出来、新年の礼服も過ぎる程の者を新調し、少しなれ共餅もつきてもらひなど、簡単な書生の生活の用向は総て思ふまゝに調ひ、何となく元旦のまちかぬるか如き心地せらるゝは先つ得意の時代ならんか。殊に清潔なる八畳の間を我城郭として、益是万端自分の物斗り、友人の外厭ふべき世事係累上の事をいひくる人もなく、又心をも注がず、殊に将来再びかゝる安楽なる年のくれのなかるべし。そは考ふべからず。然しかゝる境遇にて快く新年を迎へ得るは是れ皆な父母の賜なり。其父上母様は国元に於て随分時事の御配慮あらん。今年此歳暮ニ於て満足し得ぬは此一事こそあるなり。伏て天地神祇ニ祈るは我両親の長寿にあらせらるゝ様、是のみ。又平素我処世立身の方針ニ付き、根本とせなば此事まで何とか老後の安心せらるゝ様、世に立たざるへからさる事哉。盟ふ。此愉快なる歳暮の感を記するに望んで未来の奮起を責むる事如斯」¹⁵⁾

しかし、温の留守中、実家は経済的危機で、家計は1,600円余の借金をかかえ、火の車であった。明治33年の年末、実家から帰れの要請により、温は全国農事会を退職し、帰郷した。前掲「私の略歴」に「余ノ不在中5ケ年ノ間ハ経済上ノ不利益莫大ナリシナルヘク、去レバ余ハ帰国後直ニ父上ヨリ家事上ノ世話ヲ譲リ受ケ其整理ニ着手シタルモ、終局2町6反歩ノ田畑ノ残り居リタルノミナリシ。而カモ尚其僅カノ財産ニ対シ、1,500円ノ負債ト頼母子ノ掛金115円ト米15俵余ノ弁償スヘキ者アリ」¹⁶⁾とある。

3. 温泉郡農会技師時代

明治34年(1901)1月から温は再び温泉郡石井村大字南土居で農業に従事

15) 『岡田温日記』明治32年12月31日。

16) 岡田温「私の略歴」その1。

した。34年初めの岡田家の土地所有は2町7反余りであった。

東京から帰郷した温に就職の話が相続いた。初めに農学校の教頭の話があったが断り、明治34年4月、浅野長道温泉郡長の要請により温泉郡農会技師に就任した。その理由について、温は前掲「私の略歴」の中で「当時、松山農学校が建築し、殆と竣工し、開校はしていたが、一年生だけで職員も揃ふて居なかった。初代校長は駒場出身の野村豊常氏であったが、野村校長から、教頭で来て呉れといふ交渉があった。野村氏の言れるには、君が郷里で活動地盤をつくるには、一時農学校に奉職して、県下の有志の子弟を教育し、全县に多くの門下生を持つことが一番よいから来い、というのであった。学校を出て間もない私には最上の条件であり、第三者からは郡農会よりは、遥により地位と観られたのだろふ。友人なども頻りに勧めた。だが、私は教育者には不適當と思っていたから、関心をもたなかった。私は何かしら大衆指導がしてみたかった。だから直接農家を指導する郡農会が最も良い修養処のように感じ、温泉郡農会に就職した。自由を好む青年が全国農事会で、各府県の農会の活動状況を見聞し、官庁よりも試験場、農学校よりも民間団体に働く方が面白いように思い込んだこと、今ひとつ次のような修業により農家の指導に相当自信をもっていたので、農学校で少数な生徒を教育するよりは、村に入って全農家を教育するのが面白くもあり、農事改良発展上即効果が大きいと考えたことなどが、一意、農会に向はしめたように思う」¹⁷⁾と述べている。

以後、温は4年間、温泉郡農会技師としての活動した。温泉郡農会は、各町村で短期農事講習会を開催していた。温はその講師となって活動し、また、温は郡内各町村を訪れ、農事改良（短冊型苗代、害虫駆除、田植の正条植等）を指導した。温泉郡の米反収は愛媛県下より高いが、それは土地・気候条件の有利さとともに、農会活動の成果でもあると考えられる（明治36年：全国1.62石、愛媛県：1.63石、温泉郡：1.69石。37年：全国1.79石、愛媛県：1.96

17) 岡田温「私の略歴」その3。

石、温泉郡：2.00石。38年：全国1.33石、愛媛県：1.57石、温泉郡：1.74石。39年：全国1.60石、愛媛県：1.77石、温泉郡：2.14石。40年：全国1.69石、愛媛県：1.85石、温泉郡：2.24石¹⁸⁾。

なお、温は、明治34年4月、伊予郡松前村岡井弥太郎・ユキの二女イワ(明治8年8月22日生まれ、25歳)と再婚した。そして、35年2月に次女禎子、36年12月に3女敦子が誕生している。

また、温は、34年末には、1,600円余りの借金返済のために、1町4反9畝9歩を1,922円で売却した。その結果、温宅の田畑は1町2反1畝2歩に減少した。

第2章 岡田温と四阪島煙害問題

明治38年5月15日、愛媛県農会幹事鶴本房五郎の要請により、千石興太郎技師の後任として愛媛県農会技師に就任した。温の活動分野が、温泉郡から愛媛県全体に拡大することになった。

1. 愛媛県農会技師活動

温は愛媛県農会技師として、県下の各町村に出張し、県内の農事講習会、農事改良のための巡回講話等に精力的に取り組んだ。

例えば、技師に就任した明治38年5月以降および明治39年の出張、業務等を岡田温の日記から挙げれば次の如くである。

明治38年

- ・5月25日～6月6日 東京へ高等農事講習講師要請のために出張
- ・6月12日～13日 郡農会長会議開催
- ・6月16日～7月1日 南・北・東3宇和郡に田植の正条植励行のため
に出張

18) 各年次『愛媛県統計書』。

- ・ 7 月 12 日～13 日 愛媛県農会評議員会開催
- ・ 7 月 27 日～8 月 4 日 周桑・新居・宇摩・越智郡に正条植調査，害虫
駆除督励等のために出張
- ・ 8 月 6 日～12 日 上浮穴・喜多・西宇和・伊予郡に巡視のため
出張
- ・ 8 月 16 日～9 月 7 日 高等農事講習会開催
- ・ 9 月 13 日～27 日 喜多郡に害虫駆除督励のために出張
- ・ 9 月 27 日～30 日 伊予郡に作毛品評会，害虫駆除督励のために出張
- ・ 10 月 13 日～18 日 西宇和郡に愛媛県農事大会(第 6 回)のために出張
- ・ 10 月 23 日 愛媛県農会評議員会開催
- ・ 10 月 24 日～29 日 愛媛県農会通常総会開催
- ・ 11 月 12 日～12 月 2 日 東宇和郡農事講習会のために出張
- ・ 12 月 5 日～22 日 南宇和郡農事講習会のために出張

明治 39 年

- ・ 1 月 26 日～29 日 越智郡今治町へ稲穂品評会審査のために出張
- ・ 2 月 6 日～15 日 愛媛県重要農産物品評会審査（松山市）
- ・ 2 月 28 日～3 月 5 日 愛媛県農会通常総会開催
- ・ 3 月 10 日～30 日 新居郡新居浜村へ農事講習会のために出張
- ・ 4 月 6 日～17 日 宇摩郡蕪崎村へ農事講習会のために出張
- ・ 4 月 18 日～5 月 7 日 周桑郡福岡村へ農事講習会のために出張
- ・ 5 月 9 日～11 日 伊予郡へ農事講習会のために出張
- ・ 5 月 12 日～18 日 高知へ四国区実業大会のために出張
- ・ 5 月 19 日～26 日 伊予郡へ農事講習会のために出張
- ・ 6 月 5 日～10 日 温泉郡の諸村の巡視（稲作品評会）
- ・ 6 月 23 日～7 月 9 日 越智郡・新居郡の諸村の巡視（正条植の督励）
- ・ 7 月 16 日～20 日 畜産講習会開催（県農学校）
- ・ 7 月 26 日～29 日 温泉郡の諸村の巡視（稲作品評会）

- ・ 8月2日～5日 越智郡・周桑郡へ煙害調査のために出張
- ・ 8月9日～11日 畜産講習会
- ・ 8月24日～27日 宇摩郡土居村へ農事講習会のために出張
- ・ 8月31日～9月3日 今治へ出張（横井博士出迎え）
- ・ 9月7日～15日 上浮穴郡の諸村へ巡回講話
- ・ 9月17日～19日 越智郡煙害調査のために出張
- ・ 9月22日～10月14日 北宇和郡宇和島町へ農事講習のために出張。この時、煙害調査書の執筆を始める。
- ・ 10月20日～24日 温泉郡の諸村へ巡視（稲作品評会）
- ・ 10月27日～31日 愛媛県農会通常総会開催（松山）
- ・ 11月14日～16日 興居島などを視察（梨園）
- ・ 11月24日～12月13日 第14回全国農事大会のため東京へ出張
- ・ 12月19日～21日 新居郡へ講話のために出張

このように、温は毎月の如く県下に出張し、農事講習会、農事講話等に従事した。

2. 温と四阪島煙害問題

愛媛県農会技師として、温が尽力したのが住友四阪島煙害問題であった。温は後、本職の「(農事) 改良奨励の任務を放棄し、満腔の同情を以て」¹⁹⁾ 取り組んだと振り返っている。以下、温の煙害問題への活動を具体的に考察しよう。

その前に、住友の別子銅山の沿革とその煙害について概略を見ておこう。

1) 別子銅山沿革概略および煙害について

別子銅山は元禄3年（1690）に切上り長兵衛により発見され、翌4年住友が幕府に稼行を出願し、御用銅上納を条件に許可を受け、稼行を開始した。住友は別子山において、和式により焼鉋及び溶鉋し、粗銅を生産し、それを大坂の

19) 「四阪島煙害被害者諸君に望む」『愛媛県農会報』第107号、明治44年2月。

鰻谷に送り精銅に精製した。それに伴い、別子山附近に煙害発生したが、住友は被害の山林、田野を買収、また、労働者は附近の農民から雇用し、食糧も農家から購入したため、附近の農民は住友の「徳」に感謝し、煙害問題は表面化しなかった。また、住友は鉍毒水を国領川に垂れ流し、灌漑流域の田畑、数千町歩の農作物に多大の被害を与えたが、西条藩は被害の程度に応じ、租税の減免を行ったため、これも余り表面化しなかった²⁰⁾

明治維新になり、別子銅山は土佐藩に接収されたが、支配人広瀬宰平の必死の運動により事業継続がなされた。明治7年(1874)、住友はフランスの鉍山技師ルイ・ラロックを雇い、その報告書に基づき、9年以降、銅山近代化に乗り出した。15年、住友は新居浜村惣開に洋式精錬所の建設を出願し、許可を受け、17年に完成し、操業を始めた。25年12月、別子山と新居浜間の鉄道が開通し、鉍石の運搬増大し、精錬が拡大した。

それに伴い、明治26年(1893)以降、新居浜村周辺で煙害が拡大した。「明治二十五年私設鉄道開通スルニ及ヒ製錬事業ハ急速ノ勢ヲ以テ拡張セラレ、二十六年ニ至リ新居浜村附近ノ稲作其他ニ対シ俄然大被害ヲ現ハスニ至レリ」²¹⁾

そこで、被害農民たちは、住友に対し、損害賠償ならびに除害にかんし、交渉開始した。また、大阪鉍山監督署、愛媛県に救済方を請願した。しかし、住友側は「虫害」として拒否した。

明治27年(1894)に麦作に著しい被害が発生した。そこで、被害農民は、住友鉍業所支配人に直談判をせんと、新居浜精錬所に多数押し寄せ、騒擾事件を引き起こした。

明治28年10月、住友(別子銅山支配人伊庭貞剛)は新居浜精錬所を四阪島に移転することを発表し、12月出願した。理由は煙害ではなく、「施業用地狭隘」ためであった。翌29年12月、大阪鉍山監督署より許可、工事に着工した。

明治37年(1904)8月、四阪島精錬所が一部完成し、試験操業が始まった。

20) 愛媛県経済部農務課『経過』1～3頁。

21) 同、4頁。

表1 新居浜精錬所時代の新居浜村・金子村の稲作被害

	平均反収	新居浜村・金子村の反収
明治22年	2 石	1.999石
明治23年	同	1.903石
明治24年	同	1.918石
明治25年	同	1.788石
明治26年	同	1.197石
明治27年	同	0.995石
明治28年	同	1.331石
明治29年	同	1.248石
明治30年	同	1.093石
明治31年	同	1.417石
明治32年	同	0.685石
明治33年	同	0.843石
合計	24石	16.420石
平均	2 石	1 石 3 斗 6 升 8 合

(出典) 愛媛県経済部農務課『愛媛県東予地方ニ於ケル別子銅山煙害問題ノ経過』昭和12年、22～23頁。

そして、12月にすべて完成し、38年1月より本格操業となった。これにより、新居浜精錬所は閉鎖されたが、その間の新居浜精錬所の煙害は周辺農村に被害を与え続けたが、住友は賠償をしなかった。

2) 温の四阪島煙害問題への取り組み

四阪島精錬所の煙害問題について、岡田温の活動を中心にしながら、年次毎に、具体的に見ていくことにする。

①明治37年

明治37年(1904)8月、四阪島精錬所が一部完成し、8月1日から溶鋳炉の試験操業が始まった。ところが、同年12月、早くも対岸の越智郡宮窪村友浦の麦に煙害が発生した。まったく予想外であった。

②明治38年

明治38年(1905)1月、四阪島精錬所が本格操業すると、越智・周桑の両郡を中心に煙害が拡大した。住友側は驚愕した。住友は『別子開坑二百五十年史話』の中で、「精錬所を遠く陸地より隔絶し、四面環海の島にさへ移せば、

煙害および之に伴ふ謂はゆる煙害問題は即時解決するものと監督官庁も、専門学者も斯業者も、地方人も、技師も農民も、すべて直接間接煙害なるものに関心を持つ有らゆる人々は、一様にかく思ひかく信じていた」のに、全く想定外で、「鉦業所支配人以下、あまりの意外さに、愕然としておぼえず色を失した」²²⁾と述べている。

そのような時、温が5月15日、愛媛県農会技師に就任した。温は、同年7月27日から8月4日にかけて、東予の諸郡（周桑・新居・宇摩・越智郡）に正条植調査・害虫駆除予防督励のために出張していた。その最終日の8月3日、温に越智郡や郡農会から調査の要請があったのだろう。越智郡役所にて、越智郡農会長武田徳太郎、同郡技手加藤徹太郎と面会し、翌4日に被害地を視察した。4日の日記「武田、加藤両君同行。附近ノ煙毒地ヲ巡視シ、被害稻ノ標本ヲ取り、九和村ヲ経テ龍ノ岡ニ出テ、莊府越ヲナシ、加藤君ニ別レ、北條ニ出テ、松山ニ歸り、藤岡ニ宿ス」とある。これが、温の日記に出てくる煙害問題の最初の記事であった²³⁾。

③明治39年

明治39年（1906）、温は4月19日から5月5日にかけて、周桑郡福岡村大字丹原での農事講習会に出張した。その間の、4月23日講義を休講して、越智郡に行き、翌24日に煙害地の調査・視察を行った。24日の日記に「近見村山部ノ煙害ヲ視察ス。松ハ過半枯凋シタルモ、他樹及作物ニ異状ナシ」とある。

明治39年7月19日から激しい煙害が越智・周桑郡を襲い、生育中の稲作に重大な被害を与え、稲が萎縮し、枯死する深刻な事態が見られた。

そこで、明治39年7月30日、越智郡の被害町村は「越智郡煙害調査会」を結成（代表は桜井村長曾我部右吉）。そして、温に調査を依頼した。

温は、8月2～4日、煙害調査のために、越智・周桑郡に出張した。2日は越智郡日吉村を巡視した。「日吉村附近ヲ巡視ス。被害アリ」。3日には同郡農

22) 住友本社『前掲書』462～463頁。

会技手重村源太郎や同郡技手加藤徹太郎とともに、同郡富田村、桜井村を巡視した。同村の煙害も「被害大ナリ」であった。そして、4日、温は被害稲を東京帝国大学農科大学と山田幸太郎（大洲中学校長、植物病理学）に送り、調査を依頼した。そして、この日は周桑郡に向かい、楠河、三芳、庄内村の被害地を巡視した。やはり、被害甚大であった。

この7月の煙害を背景に、町村長たちが動き始めた。

8月16日、周桑郡壬生川町長一色耕平ら8人の町村長が安藤謙介知事（政友会系）に「煙害ニ関スル上申書」を提出した。「客日十九日以来、数次ニ越智郡四阪島ナル住友溶鋸炉ヨリ噴出スル銅飛来ノ為メ稲葉ハ褪色シ、加フルニ畦畔ノ大豆葉其他ノ農作物ハ変色シテ枯死スルノ状況ヲ呈スルニ至レリ」とし

23) 木本正次『四阪島（下）』（講談社、昭和47年）は四阪島煙害問題を正面から取り上げた小説で、大変興味深い。その冒頭の書き出しで、明治38年7月初め、梅雨明けの kann 照りの暑い午後、県庁の廊下で、岡田温が越智、周桑郡の町村長、曾我部右吉、一色耕平、青野岩平とすれ違い、そこで、奇怪な農害の訴えを聞き、煙害ではないか、と言われ、温は「まさか」と答えたが、一色が「いや、岡田さん。失礼じゃが、学問にまさかは禁物じゃないですか」とたしなめられ、そして、青野から「学問のあるあんに、東予の何十万の農民のために、そこんとこ、しっかりと調べてもらわにゃ」と言われ、温は「承知しましたよ。とことんやってみますよ。それが県農会の当然の仕事ですからねえ」と答えたことを記している（木本著、7～18頁）。岡田温の明治38年の日記を見ると、7月6日と8日に確かに県庁に行っているのに、木本正次が記したようなことがあったのかも知れないが、日記にはそのようなことは一切記されていないので、木本の創作かも知れない。また、同年8月初め、温が調査のために今治に行き、越智郡の町村を回り、さらに周桑郡に行き、壬生川町で一色耕平に会い、「一色さーんッ。これを見て下さい。これはもう、病中害ではありませんよ」と共に煙害を確認し、煙害闘争を闘う決意したとある（木本著、22～28頁）。ただ、岡田温の日記を見ると、この時期、確かに周桑郡に行ったが、壬生川町に行った記事もなければ、一色耕平と会った記事もない。温は7月27日に松山から周桑郡に行き、福岡村丹原に宿泊、28日に福岡村から小松町に行き宿泊し、29日に新居郡水見村、西条町、新居浜村に行き、宿泊、30日に新居郡金子村、角野村、船木村、そして、宇摩郡土居村、三島町に行き宿泊、31日に宇摩郡役所に行き、同郡の各村を巡視、宿泊、8月1日に周桑郡に帰り、小松町に宿泊、2日に周桑郡三芳村を経て、越智郡桜井村に行き、今治に宿泊、3日は越智郡役所、4日に越智郡の町村を回り、松山に帰っている。木本氏は史実を踏まえて書かれた小説と思われるが、日記からは確認できない。また、木本著には、温の日記に照らして、年月などで、やや不正確な箇所も見られる。例えば、木本著の17頁に温が明治38年4月14日越智郡下の視察とあるが、この日は道後村で農事講話を行っており、39年4月24日の間違いであろう。また、31～32頁に温が39年8月10日越智郡に出張し、煙害を目撃しているとするが、これは、38年8月4日の間違いであろう。

て、県に調査を要求した。

また、8月18日、越智郡桜井村長曾我部右吉ら11人の町村長が安藤謙介知事に「煙害ニ付上申書」を提出した。「昨三十八年一月同所（四阪島住友鋳業所）カ溶鋳事業ヲ開始スルニ至リテ、事実ハ予想ニ反シ、其煙毒ハ当村附近ノ農産物ニ異状ヲ呈シ、生育收穫ニ於テ平年ノ如クナラス…爾來日ヲ経ルニ従フテ、農作ノ不結果ハ益甚シキヲ加ヘ、今春麦作ノ收穫ハ減石ヲ見ルコト、ナリタリ。茲ニ於テ愈煙害ノ著シキヲ認メ、農民ハ何レモ不安ノ感ニ襲ハレ居ル折柄、今ヤ被害ハ続ヒテ稲作ノ上ニモ及ビ、大ニ其生育ヲ妨ケラル、ノ不幸ニ会セリ。殊ニ七月中旬東北風ノ吹き送リタル鋳煙ハ南方数里ニ波及セシ程ニテ地方一帯ノ田面ハ著シク被害ノ度ヲ増シ、稻禾ハ一般ニ萎縮シテ成育ヲ遂ケルコト能ハズ、甚シキハ枯死スルモノアリテ、真ニ憂フヘキノ状態ヲ呈セリ」として、対策を上申した²⁴⁾

さらに、9月9日から12日にかけて、またまた、越智・周桑両郡に盛んに亜硫酸ガスが襲来した。その被害状況は激甚であった。桜井村長曾我部右吉の手記によると、「三十九年九月九日ヨリ十二日ニ至ル間続キ東風輕ク吹き来タリ、二三時間降雨又ハ曇天トナリシモ風向及風力ハ少シモ変ゼズ、絶ヘズ吹き送レル鋳煙ハ遂ニ稲作ニ大害ヲ与ヘタリ。九月四五日頃出穂ノ分ハ已ニ多少稔リテ、籾ノ皮固クナリタル故カ被害少ナクシテ其ノ穂ノ下部ニ多少ノ被害ヲ与ヘタルナリ。又九月十二日以後出穂ヲ初メタルモノ更ニ害ナキヲ認メタリ。然ルニ八日頃ノ出穂ニ対シテハ激甚ナル被害ヲ与ヘタ。其ノ模様ハ最初籾ノ外部樺色トナリ、追テ変ジテ黒色トナリ、恰モ半面焦ゲタル様ニナリ、其ノ中ヲ見ルニ花卉全ク枯死シテ生育ノ力ナキヲ認ム。田面ハ一面変態ナル色トナリテ如何ニモ心細キ感ヲナセリ。桜井村内ハ出穂真最中ニテ被害田面貳百八拾歩ニ渉ル」²⁵⁾

この9月の煙害に対し、「越智郡煙害調査会」は温に調査を依頼した。9月

24) 『愛媛県史 資料編 近代3』567～569頁。

25) 愛媛県経済部農務課『経過』26頁。

17日、温は煙害調査のため、越智・周桑郡を訪れた。この日は夜、船にて今治町に赴き、翌18日に重村源太郎越智郡農会技手、加藤徹太郎同郡技手及び富田村村長・清水幸太郎と同行し、沿道の被害を見ながら、桜井村を視察した。翌19日、温は加藤技手とともに、周桑郡楠河、三芳両村の煙害を調査して、夜、帰松した。この時の煙害状況は日記には記されていないが、後の『煙害調査書』に、「9月上旬（稲の出穂開花期中）、越智郡沿海各村其他数村ノ一部及周桑郡ノ一部ニ於テ突然稲作ニ異状ヲ生ジ、穂ノ全部若クハ一部灰黒色ヲ呈シ、空前ノ大変徴ヲ現出セリ。…惨憺タル当時ノ光景ハイヤシクモ一片農業志想ヲ有スルモノノ悚然トシテ被害ノ容易ナラザルニ驚カザルモノナカリシ」²⁶⁾と記されている。

温は、9月23日から10月12日にかけて、北宇和郡農事講習のため、宇和島に出張していた。その出張中の10月9、10日に「越智郡煙害調査会」から要請の『煙害調査書』の原稿の執筆を始めた。9日の日記に「休講。煙毒調査書ヲ草ス」、10日「休講。同上」とある。その後も執筆を続け、11月17、18日の両日、『煙害調査書』の清書を行い、20日に県農会の会議に付し、23日に『煙害調査書』を「越智郡煙害調査会」に郵送した。17日「煙害調査書ヲ清書ス」、18日「終日居宅。煙害調査書ヲ認ム」、19日「測候所ヲ訪問ス」、20日「煙害調査書ヲ了草シ、会議ニ付ス」等々とある。温が「越智郡煙害調査会」に提出した『煙害調査書』は、明治39年11月21日付けである。

『煙害調査書』は、煙害中亜硫酸ガスが最も激甚であること、亜硫酸ガスは植物の細胞中の水と結合し、硫酸を生じ、惨害をもたらすこと、四阪島精錬所の銅鉱石は硫黄分が特に多いこと、四阪島精錬所の煤煙の流布範囲は越智・周桑郡の沿海各村のみならず、海岸より2～4里まで流布すること、そして、越智、周桑郡における作物被害の状況を論述し、そこでの結論は、「一、亜硫酸瓦斯ハ作物ニ有害ナリ。一、四阪島精錬場ヨリ噴出スル煤煙中ニハ多量ノ亜硫

26) 岡田温『煙害調査書』明治39年11月。

酸瓦斯ヲ含有ス。一、本年度ニ於ケル越智・周桑両郡ニ於ケル稲作被害ノ直接原因ハ、病虫害害、土壤の悪変、暴風、霖雨、旱魃ニアラズ。一、本年度ニ於ケル越智・周桑両郡ニ突然現出シタル稲作被害ノ直接原因ハ四阪島ノ煤煙ナリ」と断定した。この『煙害調査書』は後、愛媛県から「当時技術者ノ発表セシ最初ノモノ」と評価され、また、小説家・木本正次からも「亜硫酸ガスによる農作被害に対する学問的な究明としては、恐らくは日本で最初のもの」と高く評価されている²⁷⁾。

④明治40年

明治40年(1907)、温は1月5日から23日にかけて西宇和郡での農事講習会に出張した。その講義のかたわら、温は『海南新聞』に「煙害調査顛末」を13回にわたって執筆している。それは、前記の『煙害調査書』の解説であった。

明治40年4月8、9日の両日、亜硫酸ガスが越智、周桑両郡に來襲し、麦作に甚大な被害を与えた。

温は、当時、4月7日から27日にかけて三重県に第9回関西府県聯合共進会のために出張していた。帰郷直後の4月30日、越智郡より煙害の電報があり、5月4日、煙害調査のため、越智郡に出張した。午後1時半今治に着し、直に越智郡技手の柳田源十郎とともに近見村、今治町、日吉村を巡視した。近見村が激甚であった。日記に「柳田君ト近見、今治町、日吉ヲ巡視ス。近見村大新田尤モ劇変ナリ」とある。翌5日、温は柳田技手とともに、清水、立花、富田、桜井の各村を巡視した。桜井村が激甚であった。日記に「立花ハ最近ノ被害見ヘ、富田モ近見ノ如ク甚シカラス。桜井村ハ大分、国分及其南尤モ激甚ナリ。其ヨリ周桑郡ニ入ル。楠河、三芳其他被害見ヘズ」とある。

6月、苗代の季節であるが、またまた煙害が襲った。6月3日に越智郡農会から温宛てに苗代煙害被害の電報が来た。4日の日記に「昨夜越智郡ヨリ苗代

27) 愛媛県経済部農務課『経過』28頁。木本正次『前掲書』33頁。

煙毒被害ノ電報アリ、不在ノ返電ヲナス」とある。この時は所用のため出張でしなかつた。

煙害の拡大・激化に対し、愛媛県（安藤謙介知事）は明治40年6月19日「愛媛県臨時鉍毒調査会」を設置した。調査会の委員長は内務部長の西久保弘道、委員は農事試験場長の直井市輔、県立農学校長の吉野得一郎、農事試験場技師藤村誠太郎、ならびに温が委員となった。そして、調査会は被害地の調査を行い、9月12日に直井・吉野・藤村・岡田の委員が西久保委員長宛に報告書を出し、9月21日に西久保委員長が第1回調査報告を安藤謙介知事に提出している。そこでの結論は、「明治三十九年及四十年年度ニ越智・周桑両郡ニ於テ突然発現シタル作物被害ノ直接原因ハ、病菌昆虫類ノ害、土壤ノ悪変、栽培拙劣、暴風、霖雨、旱魃等ニアラズシテ、四阪島溶鉍炉噴煙所含ノ亜硫酸瓦斯ノ操作ナリトス」であつた²⁸⁾。前年の温の調査報告とまったく同じ結論であり、また、表現方法も似ており、温が中心となり、執筆したものと考えられる。

なお、当時の愛媛県知事は政友会系の安藤謙介知事（明治37年11月～42年7月）であり、また、当時の住友の家長・住友吉左衛門（華族徳大寺家の6男隆麿が、住友の養嗣子となり、第15代を相続し襲名）は、政友会総裁西園寺公望の弟であり、この時期の内閣は第1次西園寺内閣（明治39年1月～41年7月）であり、県や政府に歯向かうことになり、温は煙害問題に取り組むに当って、辞職願いを懐に抱いて取り組んだという²⁹⁾。

⑤明治41年

明治41年（1908）、本年も煙害が吹き荒れ、煙害反対運動が最も大衆的に高揚した時期であつた。

明治41年1月13日、「愛媛県鉍毒調査会」があり、出席した。そこで、住友に鉍害を認めさせる交渉をすることをきめ、煙害の被害調査方法を討議した。そして、温が委託を受けた。この日の日記に「午后鉍毒調査会アリ。越智

28)『愛媛県史 資料編 近代3』571頁。

29) 岡田温の長男、故愼吾氏の妻、環さんの話。

郡長欠席ノ外、総テ出席シ、鉦主ヲシテ煙害ヲ承認セシムル交渉開始ヲ主トシ、被害程度調査法ヲ討議シ、更ニ五名ノ委員ヲ置キ、其案件ヲ起草スルコト、シ、散会ス」とあり、温も起草委員となった。17日、「鉦毒調査会」の委員会が開催され、温が委託事項を起案した。温の役割大である。

4月19日より25日まで連日にわたり、東北風が吹き荒れ、亜硫酸ガスが周桑郡・越智郡各村を襲い、麦作に甚大な被害を及ぼした。

そのため、4月26日、周桑郡の農民約2,000名が雨降る中、蓑笠に腰弁当て三芳村大明神河原に集合し、農民大会を行い、四阪島硫煙解決のために、農商務大臣、大阪鉦山監督署への陳情、住友への面談、知事への陳情等を決めた。そして、27日農民代表は、別子鉦業所副支配人（松本順吉）と面談し、四阪島除害設備を完成し、亜硫酸ガスを無くす方法を講ぜよ、もし出来なければ、精錬所を撤廃せよと要求した。しかし、松本の回答は要領を得なかった³⁰⁾

この煙害被害の拡大・激化に対し、4月28日から、安藤知事は周桑・越智郡の煙害視察に出かけ、温も同行した。この日は千原鉦山（周桑郡桜樹村）による煙害の被害地を視察し、福岡村大字丹原に宿泊した。翌29日は、周桑郡の各村を巡視した。被害甚大であった。この日の日記に「周布、多賀、壬生川以北ヲ巡視ス。同地ハ空前ノ被害ニテ、殊ニ三芳村甚シ」とある。そして、この日、壬生川町（町長が一色耕平）では被害農民800人が、三芳村（村長が渡辺静一郎）では1,200名が集会を開き、知事に陳情した。知事は農民が住友と直接交渉して騒擾となることを回避するために問題の解決を知事に一任すること、知事が農商務大臣をして住友に交渉させ、農民側に有利な解決をはかるつもりであると言明し、農民を慰撫した³¹⁾。温の日記の欄外にも「知事、周桑郡被害ヲ巡視シ、農民ヲ慰撫ス」とある。そして、夕方、越智郡桜井村に行き、翌30日、越智郡の諸村を視察した。こちらも空前の被害であった。この日の

30) 一色耕平『愛媛県東予煙害史』大正15年、17～18頁、愛媛県商工労働部労政課『資料 愛媛労働運動史』第2巻、6頁など。

31) 愛媛県商工労働部労政課『前掲書』8頁、など。

日記に「加藤、曾我部両君ト共ニ桜井、富田以北ノ被害地ヲ見ル。富田ノ東村、喜多村尤も劇甚。是又、空前ノ惨状ニテ平均半作ハ六ヶ敷カルベシ。農民数途ニ要シテ哀願ス。其情真憫察スベシ」とある。そして、今治町に行った。

5月1日から温は今治町での農事講習会を開会したが、煙害騒動のため出席は少なかった。この日の日記に「越智郡講習開会式。会長臨席、式ヲ挙ク。式後、日吉村ノ被害地ヲ視テ直ニ帰省サル。当日ハ各村長、千葉技師臨席セラル。煙害其他混雑ノタメ、生徒出席少ナシ」とある。2日、安藤知事は越智郡の煙害地を視察した。それにあわせて、桜井村（村長は曾我部右吉）の農民1,000名が法華寺に、富田村（村長は清水幸太郎）の農民800名が真光寺に農民大会を開き、鉾毒調査会の無力軟弱を非難し、知事に問題の解決を要望した。それに対し、安藤知事は農民を慰撫して善処を約束した³²⁾ この日の日記にも「知事被害地ヲ巡視シ、農民ヲ慰撫ス。数日来、煙害ノタメ、県ノ各要部、鉾山監督署、農商務技師、住友技師等毎日被害地ヲ巡視シ、農民ハ処々ニ集合シ物情騒然タリ」とある。3日、温は講習会を休み、越智郡の煙害被害地を視察した。被害は甚大であった。日記に「内山技師、吉野君及其他一行ト、近見、波止浜、波方、日吉ノ各被害地ヲ巡視ス。日吉村村尤モ甚シク、西北ニ進ムニ從ヒ程度輕シ」とある。4日以降、温は農事講習会の講義を続けたが、その間の5日に農商務大臣宛の煙害に関する建議案を草した。「午后講義。生徒四十名。煙害ニ関スル建議案ヲ草シ、農会ヘ送ル。但シ、農商務大臣宛」。6日には午前講義し、午後日吉村の被害麦を採取している。10日、住友に交渉に行った煙害陳情委員が帰郡して、報告を受けたが、交渉不調であった。この日の日記に「午前講義。…曾我部、清水、上田其他五名、煙害陳情委員帰郡ス。其談ニヨレバ住友ハ共同試験ヲ謝絶スト。即チ当初ノ談判不調。局面愈困難トナル」とある。なお、共同試験とは、愛媛県鉾毒調査会が煙害賠償の根底を得るために住友と共同して米麦減収試験田の設置を申し入れたものであったが、この記

32) 愛媛県商工労働部労政課『前掲書』9頁。

事の通り拒絶された。

7月28日、周桑郡内町村長14名（一色耕平壬生川町長ら）が連署して、「煙害防除ノ議ニ付申請」を第2次桂太郎内閣（明治41年7月14日～44年8月30日）の農商務大臣大浦兼武に提出した。この建議案は5月5日の記事から見て、間違いなく岡田温が執筆したものであった。建議案は四阪島と千原精錬所の煙害を述べ、「両鉦主ニ対シ、害毒防備ノ完成ヲ告ケシメ、為シ能ハスンバ全然鉦業所ヲ撤廃ノ御厳命」を「切望」とするという激しいものであった³³⁾。

7月29日、新居郡に煙害が発生した。温は電報を受け、出張した。この日の日記に「新居郡ニ煙害アリトノ電報ニヨリ、五時発シテ出張。氷見役場ニテ、久門、小野両氏待居リ、共ニ実地ヲ見ル。同村、太平、蛭子両新田百三十余町ノ処ニ至〔リ〕、局部甚シキアルモ一般ハ左程ニモアラズ」とある。

8月下旬、またまた越智郡、周桑郡で煙害大騒動が起きた。安藤知事が住友吉左衛門に対し、重役の現地視察を要請し、22日、住友本店理事中田錦吉、住友別子鉦業所支配人久保無二雄らが越智郡に調査に出張した。中田たちを待ち構えていた越智郡の被害農民は、日吉村別宮の黒住教会で中田たちと交渉し、稲の開花期の30日間精錬中止を要求した。さらに翌23日も越智郡役所で交渉を行い、同様に30日間精錬中止を要求した。しかし、中田らは即答しなかった。会見のあと、中田理事らは立花村、富田村、桜井村を視察したが、帰途、農民1,300余名が中田を包囲し、精錬中止を迫り、さらに今治の宿舎・吉忠旅館にまで追いかけて、包囲し、即答を要求し、大騒動となった。さらに24日に騒動はさらに拡大・発展し、4,000名ほどの農民が南光坊に集合し、中田との会見を要求し、会見がなされたが、農民たちが激昂し、不穏な状況になり、中田らは警官に守られて、脱し、さらに25日早朝、今治を脱し、海路松山に逃げた³⁴⁾。これは俗に南光坊事件といわれている。この時は、温は松山に居て、騒動には関係していないが、温は24日の日記に「越智、周桑ニ煙害大

33) 『愛媛県史 資料編 近代3』576頁。

34) 愛媛県商工労働部労政課『前掲書』21～26頁、木本正次『前掲書』73～95頁。

騒動アリ。中田、久保両重役、夜ニ乗シテ松山ニ来ル」と記している。

その後も越智・周桑の農民たちの怒りはおさまらず、8月25日、越智郡内の農民5,000名が今治海岸に集合し、「越智郡煙害除害同盟」を結成し、8月26日には、周桑郡の農民4,000名が三芳村大明神河原に集まり、農民集会を行い、さらに、2,000人ほどの大群が大八車に食糧・寝具をつんで、新居浜鋳業所に押し寄せ、翌27日、代表たちと久保支配人との間で激しい交渉が行われた。この時、久保は独断であるが、煙害を認め、賠償を約束している。³⁵⁾

このような煙害問題の緊迫化に対し、8月28日、温は、門田晋愛媛県農会長らと会談し、県選出代議士を動かすために、実地視察を要請することを決め、電報を打った。日記に「早朝、門田会長宅ヲ訪問ス。…煙害問題ニ付打合ヲナシ、直ニ亀岡副会長ヲ呼ビ、更ニ県選出代議士ニ実地視察出張ノ照会電報ヲ発ス」とある。29日代議士たちは出張を了解した。「各代議士中五名ハ出張ヲ諾セラル」。

9月1日、温は代議士たちとともに東予に出張した。「代議士被害地視察同行、東予ニ出張ス。武市、夏井、才賀ノ三代議士、亀岡副会長、鶴本幹事同行。今治ニテ村松、田坂両代議士ニ会合。午後、日吉、近見ノ一部、別宮附近ヲ視察ス。被害空前ノ激甚ナリ」。2日には、郡役所で、代議士と被害農民が会合し、陳情を受け、終わって桜井村を視察した。「各代議士役所ニテ委員ノ陳情ヲ聞キ、夫ヨリ桜井村ニ見ル、国府尤モ甚シ。日吉ノ横田甚シ。之等ヲ見、南光坊ニ農会大会ニ臨ミ演説アリ。高山代議士、今夜着泊」。3日には、温は代議士とともに周桑郡を視察した。「周桑郡被害地ヲ見、壬生川小学校ニ農民大会アリ。委員ノ陳情、代議士ノ演説アリ。丹原泊」。4日には代議士と千原鋳山の煙害を見て、一同と帰松し、夜、梅廻家で慰労会を行った。このように、温は愛媛県選出の代議士を引き出し、そして、代議士たちは党派を超えて、被害農民の立場に立った。

35) 愛媛県商工労働部労政課『前掲書』26～28頁、木本正次『前掲書』96～124頁、など。

10月4日、京都の木村良代議士が煙害問題で今治に視察に来るとの電報が来て、5日、温は今治に出張し、木村代議士とともに、越智郡近見、日吉村を視察し、6日は越智郡と周桑郡の諸村を視察した。

10月12日、農商務省は明治41年産の稲作より正式に四阪島精錬所の煙害調査を開始することをきめ、その坪刈のために、岡田鴻三郎（畿内支場長）ら技師一行が来松し、温は県庁にて打合せを行った。坪刈は1,000箇所、農民側、住友側各2名、及び県の係官が立ち会うことになった³⁶⁾

10月18日、温は農商務省技師一行の煙害地の坪刈調査に同行した。この日の日記に「今治ニ下り、煙害地ノ視察ヲナス。近見、今治、日吉、清水、立花、富田ノ各村出穂後ハ大ニ前日来ノ惨況ヲ回復ス。然レ共尚不作ヲ免レズ」とある。19日、温は農商務省技師一行と越智郡の島嶼部の被害を視察した。「農商務一行ト共ニ住友ノ船ニテ島嶼ノ被害地ヲ巡視ス。島村ハ稲作ノ被害ハ平地ヨリ減輕ナリ」。その後、温は、全国農事総会に出席のため上京し、30日帰郷した。

11月5日、温は再び、農商務省一行の煙害地坪刈に立会うために今治に出張した。7日は上朝倉村、8日は下朝倉村、9日は津倉村の坪刈に立会った。

11月10日、温は坪刈立会いを休み、越智郡有志と第25回帝国議會（第2次桂内閣）に提出する煙害建議案について協議した。この日の日記に「越智郡有志会合、建議案ノ骨子ヲ協定ス」とある。日記に会場場所、相手、内容は書かれていないが、愛媛県經濟部農務課の『経過』によると、今治順成舎にて、越智郡煙害除害同盟委員会があり、貴族院、衆議院への請願を協議し、鉦業所の移転又は除害設備を為すこと、除害方法立つまで及び従来の損害を賠償すること、鉦業法の改正、地租の軽減、免除等を方針とし、岡田技師に草案を委託することを決めた³⁷⁾

11月11日以降、坪刈に立会った。11日は桜井、富田村、12日は富田村、13

36) 愛媛県經濟部農務課『経過』61頁。

37) 同、62頁。

日は波方、波止浜村、14日は近見、立花村、15日は立花村の坪刈、16日は無害地の大井、小西村の坪刈を行った。

11月17日、温は帝国議会に提出する煙害建議案について協議のため、周桑郡に出張し、一色耕平壬生川町長、渡辺静一郎三芳村長と協議した。この日の日記に「議會建議案協議ノタメ周桑郡壬生川へ出張。一色、渡部〔辺〕両氏ニ面会シ、事項ヲ協議シ、万歳楼ニ宿ス」とある。翌日も協議し、今治に帰った。18日の日記に「町役場ニ出張。種々打合ヲナシテ、其夕、今治ニ帰ル。昨今兩日沿道ニテ甘藷ヲ採取シテ帰ル。煙害ノ疑アルヲ以テナリ」とある。そして、20～22日は、今治の宿（順成舎）にて建議案を作成した。例えば、22日「宿ニテ建議案ヲ草ス」とある。そして、23日帰松した。

11月29日、温はまたまた今治町に出張した。それは、農商務省技師一行の煙害調査終了のため、慰労会参加のためであった。知事、部長ら県幹部、門田農会長らも出席し、旭屋で宴会が行われた。翌30日は、農商務省技師一行と四阪島に行き、精鍊場を視察し、12月1日松山に帰った。

12月5日、温は青野岩平県議（政友会、庄内村長）の囑託による第76回県議会への煙害建議案の説明文を執筆し、また、来会の一色耕平壬生川町長と帝国議会への煙害請願の件について協議した。「出勤。青野君ノ囑託ニヨリ煙害建議ノ説明文ヲ草ス。一色壬生川町長、煙害請願ノ件ニ付来松」とある。7日から温は帝国議会への請願の基礎資料『煙害調査要項』の執筆を始めた。

12月9日、開会中の第76回愛媛県会に、煙害被害4郡選出県議32名から農商務大臣宛の「煙害救済ノ議ニ付陳情」および安藤知事宛の「煙害解決ノ議ニ付上申」の建議案が出され、周桑郡選出の青野岩平県議が趣旨説明を述べた。青野県議の煙害被害の説明は詳細にわたったが、この建議案及び青野の説明は、12月5日の日記から判明するように温が執筆したものであった。この建議案は12月11日全会一致で採択され、県会の決議として、内務大臣と県知事に送付された。

12月19日、温が作成した、第25回帝国議会への建議案（請願書）の印刷

物が出来、各郡に送っている。「請願書印刷物出来、各郡ニ送ル」。また、24日には『煙害調査要項』を完成した³⁸⁾

12月25日には、温は千原鉾山請願書を起草し、26日に千原煙害請願書を脱稿し、28日に清書し、周桑郡役所へ送った。

以上のように、本年の煙害問題の公文書は殆どすべて岡田温が執筆したものであったことが日記から判明する。また、代議士たちを動かしたのも温であった。煙害問題につき、温の役割甚大なものがある。

⑥明治42年

1月6日、温は周桑郡に行き、煙害問題の代表、一色耕平壬生川町長、青野岩平庄内村長らと協議し、第25回帝国議会（第2次桂内閣）に提出する煙害救済の請願書の上京委員の上京時期を1月17日と決めた。「青野、長谷部、一色諸氏ト煙害上京委員上京期ト打合せ、来ル十七日出発ト協議シテ、其旨越智郡へ通知シ、且ツ請願書調印急施ヲ三郡ニ通知ス」。10日～16日にかけて、温は帝国議会へ提出の「煙害請願書」「煙害調査要項」の訂正、印刷などした。11日「煙害請願ニ関スル印刷物ノ修正、加除及訂正ヲナス」、12日「右請願書印刷ヲ向陽社ニ託ス」、16日「煙害ニ関スル印刷物出来〔上〕リ、地画本書ヲ取マトメ木曾周桑郡技手ニ託ス。各代議士及曾我部君ニ上京ニ関スル電報ス」等々。このように、温が請願書を執筆し、且つ完成させていた。

そして、1月17日に、一色耕平、青野岩平、曾我部右吉ら代表が上京し、貴族院、衆議院に四阪島と千原精錬所の煙害救済請願書（一色耕平外3,784名、曾我部右吉外3,504名「煙害救済ニ関スル件」）を提出した。請願書は1月27日付けで、煙害被害を述べ、これまで、被害農民は住友に対し、除害、損害賠償にかんし、温和な道で妥協を試みたが、鉾主側は冷然たる態度で拒否してきた。また、関係官庁に対ししばしば陳情を試みたが、調査中を理由に救済策を取らなかった。被害農民は、これまで、「各方面ノ慰藉ト制圧ノ下ニ忍ブ

38) 第25回帝国議会への請願書及び『煙害調査要項』は、愛媛県経済部農務課『経過』に所収。

可カラザルヲ忍ビ来リシコト数閏年、尚黙シテ無期永遠ノ解決ヲ待ツガ如キハ生等ノ終ニ忍ブベカラザル苦痛ニ有之候」と談じ、両院に対し「公明ナル裁断」を求め、希望事項として、1. 精錬場の移転若しくは完全なる除害工事の設備、2. 除害設備完成までは既往現在将来における損害の賠償並びに鉱業法の改正、を求めた³⁹⁾。

また、参考資料として提出した『四阪島煙害調査要項』は、1. 別子銅山煙害の略歴、2. 精錬場の変遷、3. 別子山銅鉱の含有硫黄量、4. 煤煙襲来の模様、5. 被害地における空中の亜硫酸ガスの含有量及び亜硫酸ガスの被害試験、6. 煤煙襲来の度数、7. 被害の概況、8. 被害植物の含有量、9. 被害町村人口戸数及被害反別、10. 米麦被害の程度、11. 畑の夏作物及山林の被害、12. 間接の被害、13. 虫害駆除の不履行、14. 学理の普及の阻害、15. 病害の誘発、16. 地主小作間の不和、17. 土地売買価格の低落、18. 不生産の失費、等々の多岐にわたっていた。この『四阪島煙害調査要項』は、明治39年の温の執筆『煙害調査書』をさらに詳細にした調査報告であった⁴⁰⁾。

このうち、煙害被害の程度を見ると、被害町村は42町村、被害面積は田9,170町、畑3,280町7反、山林7,020町4反に及び、米麦作の煙害被害高及び金額は次の如くであった。

この請願書は、第2次桂太郎内閣下の第25回帝国議会において、貴族院では2月26日に、衆議院では3月22日に採択された⁴¹⁾。

また、この第25回帝国議会において、3月23日、愛媛の衆議院議員、夏井保四郎、武市庫太、才賀藤吉、村松恒一郎が質問主意書を出し、四阪島、千原の煙害は公益を害しているので、鉱業法第72条（鉱業上危険ノ虞アリ又ハ公益ヲ害スルノ虞アリト認メタルトキハ農商務大臣ハ鉱業者ニ其ノ予防又ハ鉱業停止ヲ命ズベシ）を適用せよと主張した⁴²⁾。夏井の質問は温作成の『四阪島煙

39) 請願文は愛媛県経済部農務課『経過』63～68頁。

40) 同上、68～100頁。

41) 『第25回帝国議会誌』。

42) 同上。

表 2 米麦被害高・被害額（明治 38～41 年）

明治38年	米	9,088石 8 斗 8 升
	麦	1 万1,988石 2 斗
	被害額	22万8,337円10銭
明治39年	米	1 万5,829石 3 斗 5 升
	麦	1 万2,619石 8 升
	被害額	32万2,326円 4 銭
明治40年	米	1 万5,489石 3 斗 6 升
	麦	1 万1,735石 9 斗 3 升
	被害額	34万7,010円12銭
明治41年	米	1 万6,786石 6 斗 7 升
	麦	1 万4,465石 8 斗 8 升
	被害額	36万9,263円

（出典）愛媛県経済部農務課『愛媛県東予地方ニ於ケル別子銅山煙害問題ノ経過』90～95 頁。

害調査要項』をもとに発言したもので、ここでも温の役割は大きい。

これらを受け、桂内閣は、4 月鉾毒調査会を設置し、委員に東京帝国大学農科大学教授の横井時敬らを任命した。

4 月中旬、またまた煙害が起きた。4 月 15、16 日の両日、温は西条町で開催の第 10 回愛媛県農事大会（新居郡農会主催）に出席していたが、終わって、翌 17 日に別子鉾山を一行とともに視察し、18 日には京都府選出の木村良代議士とともに、越智郡に行き、麦作の煙害の視察に行った。富田村の煙害は空前であった。この日の日記に「木村氏同行。陸行越智郡ニ行キ、麦ノ煙害ヲ視ル。富田村字東村ノ被害ハ空前ナリ。風不知種尤モ被害大ナリ」とある。19 日は越智郡乃万村を視察した。やはり被害甚大であった。「木村氏、大島、富永、森諸氏ト乃万ノ煙害ヲ視ル。阿方ノ煙害、東村ニ亜ク」。

4 月 20 日から、県選出の衆議院議員の幹旋により、尾道で住友と被害農民の間で煙害賠償問題の交渉が行われた。いわゆる尾道会談である。それは、煙害の請願書が 1 月 27 日貴族院・衆議院に出され、議会で煙害問題が取り上げ

られ、社会問題化したため、その中で、愛媛県選出の代議士加藤恒忠、才賀藤吉、夏井保四郎、渡部修らが斡旋し、住友側も遂に折れ、会談に応じるようになった。4月20日から広島県尾道市で会談が行われた。住友側代表は本店総理事鈴木馬左也、別子鉱業所支配人久保無二雄らで、煙害農民代表は曾我部右吉、一色耕平、青野岩平、石原実太郎、上田実五郎らであった。住友側は過去・現在・将来の損害を一括して農業奨励金の名目で一時払いを主張したが、被害農民側は過去・現在と将来の損害は別個に取り扱い、将来の損害はその実情に応じて賠償するのが正当であると主張し、30日まで煙害賠償について協議がなされた。被害農民側は、明治44年12月までに除害工事を為すこと、損害賠償金は明治38年より41年末までの4ヵ年間は70万円、42年より44年の3ヵ年は毎年33万1,500円、農事奨励基金15万円を求めている。その算定は温が作成したものを基礎にしたものであった。住友側は被害農民側の主張せる賠償金の名による出金を拒み、農事改良奨励資金としての出金を主張し、交渉は決裂した⁴³⁾。温は会談の最終日の4月30日尾道に行った。5月1日の日記に「談判不調」と記している。

5月中旬、またまた、煙害が起きた。10日、温は関西府県農会聯合協議会からの帰途、今治に立ち寄り、越智郡技手の升田常一と越智郡の煙害を見て回った。被害激甚であった。この日の日記に「升田技手ト煙害地ヲ見ル。被害、昨年ヨリ劇甚ナリ」。11日は日吉村を視察。「日吉村ノ山ハ八分枯死ス」という酷い状況であった。

5月26日から、農商務省技師による煙害地被害麦作坪刈調査（5月26日～6月14日）があり、温は坪刈に立会うため、今治に出張した。農商務省からは岡田鴻三郎、堀正太郎、米丸忠太郎、伊東一二、今関常次郎、三成文一郎ら農事試験場の技師、技手21名が出張していた。26日は越智郡役所で被害町村長より陳情を受けた。27日は農商務省一行と坪刈の打ち合わせを行い、28日

43) 愛媛県経済部農務課『経過』129頁。

から全員を5組に分けて、麦作の坪刈を始めた。温は米丸忠太郎技師一行と越智郡西伯方村に行き、坪刈をし、翌29日も西伯方村で坪刈を行った。30日には一行と周桑郡に行き、丹原町役場で被害町村と会合し、また、坪刈の打ち合わせをし、温は今治に帰った。6月1日は米丸技師とともに越智郡立花村と日吉村の坪刈、2日は三成、米丸技師らと波方村、波止浜村、近見村、3日は近見村、乃万村の坪刈、4日は今関技師と下朝倉村、5日は三成技師と日高村、6日は休み。7日に旭屋にて一行の慰労会があり、出席し、翌8日帰松。

7月中旬、またまた煙害の被害があった。14日、16日、17日の間、亜硫酸ガスが周桑郡・新居郡を襲い、稲作に甚大な被害を与えた。7月20日、温は周桑郡より煙害視察の要請があり、翌21日温は朝4時周桑郡に向け、徒行、出張した。9時着し、午餐後、周桑郡農会木曾茂作技手と共に周布、多賀、壬生川の被害地を視察した。被害激甚であった。「激甚地ハ前年来、越智郡ノ被害ニ譲ラズ」。翌22日は木曾技手と庄内、楠河、三芳、吉岡、国安、壬生川を巡視した。

7月30日、第2次桂内閣は、政友会寄りの安藤謙介知事を「不偏不党を本旨とする地方長官の職務を忘却している」として更迭し、代わって、和歌山県知事をしていた伊沢多喜男が愛媛県知事に就任した。この伊沢知事の下で、煙害問題が解決する運びとなる。伊沢は明治2年信州高遠藩の旧士族の家に生まれ、28年帝国大学法科大学を卒業し、内務省に入り、岐阜県警察部長や滋賀県内務部長等を経て、40年1月和歌山県知事に就任していたが、平田東助内相から愛媛県の内政が政友会に壟断され、安藤知事は政友会の走狗になっていると、その腐敗の現状を詳細に説明され、これを肅清することならびに煙害問題の解決の為に愛媛県に赴任せよとの命を受け⁴⁴⁾、42年7月30日愛媛県知事に転任した。この時、39歳であった。

8月20日、被害農民が越智郡日吉村南光坊にて農民大会を開催し、1. 貴、衆両院に対し、煙害救済に関する請願を為すこと、2. 新任知事に陳情すること、3. 住友が被害農民の要求した稲作重要時期50日間の製錬中止を拒

絶したことに抗議し、反省を促すこと、などを決議した⁴⁵⁾

9月も温は煙害問題に従事した。4日、政府の鉋毒調査会の委員横井時敬博士、米丸忠太郎農商務省技師らが東予4郡の煙害地被害状況視察のために来松し、温は高浜に迎えに行き、翌5日、横井博士らと東予に出張した。「横井博士、煙害視察ニ随行シ、東予ニ出張。又米丸技師、佐々木場長同行。今治着後、近見、日吉、日高ヲ巡視ス。被害輕微ニテ、視ルヘキナシ。近見村清水谷ニ二、三畝激甚部ヲ見ル」。6日は四阪島、東伯方村、津倉村を視察した。7日は腕車にて周桑郡に行き、壬生川町を視察し、同役場にて周桑の委員及村長より陳情を受けている。8日は多賀、吉井、周布村を視察し、農学校にて講話をし、千原鉋山をみて、新居郡に行き、神戸村を視察し、西条亭に投宿した。9日は大町村、玉津村、高津村を視察した。10日は今治に帰り、慰労会を催した。翌11日、横井博士を見送り、温は12日に帰松した。

9月11日、周桑郡壬生川町長一色耕平らが、伊沢多喜男新知事に面会し、

44) 伊沢多喜男伝記編纂委員会『伊沢多喜男』昭和26年、『愛媛県議会史』第2巻、1120～1122頁。木本『前掲書』はその事情を次のように描写している。明治42年7月、内相の平田東助は上京中の伊沢を官邸に呼び、愛媛県政の腐敗のほかに四阪島の煙害問題について、次のように述べた。「いま、四阪島の精錬所の硫煙は、愛媛県東部の二郡—もっと詳しく言うると二郡の殆ど全部と隣接の二郡の一部—合わせて四郡に大きな農業上の損害を与えている。四阪島移転は、もともと住友自身の計画だが、私が農商務大臣だったころ、私はそれが万全の策だと考えて移転を督促した。それが裏目に出て、今百姓たちに多大の迷惑をかけていることは、議会の論議などで君も熟知している通りだ。私にしても、道義的に大いに責任を感じている。善意でしたことだが、結果が悪ければ改めるのほかない。ところがこれに対して、現在の住友当局は何の救済策も講じていない。知事の安藤は政友会に気兼ねするのか、住友の当主が西園寺公の実弟である点を憚り、西園寺公に下司な忠義立てする気で、これまた百姓のために何一つ解決の手を打っておらん。農商務省もまた、このごろは商人や工業家の手先になり果てたのか、これまた抜本的な手は何一つ打とうとしない。単に私が個人的に責任を感じるということではなく、いやしくもひとしなみに陛下の赤子である県民たちを守る為には、地方行政をお預かりしている内務省としては、正義のために断乎たる手段に出るほかはない。むろん鉋業は大事である。しかし農業は国の大本である。いまここで内務省が正義の手立てを講じないと、愛媛県も足尾のような泥沼の紛糾になりかねない…農商務省と意見が分かれたなら、内務省は一体となって君を支持する。何の遠慮もなく、ただ国家国民のために尽くしてもらいたい」。それに対し、伊沢は「はい。それでしたら…喜んでお引き受けいたしましょう」とある(木本著、139～140頁)。

45) 愛媛県商工労働部労政課『前掲書』76頁。

煙害に関する従来経過を述べ、その解決の斡旋につき、陳情した⁴⁶⁾

9月13日に、愛媛県農会において、温は煙害事件4郡の委員と会合し、打ち合わせを行った。日記にその内容が書かれていないが、一色耕平の『愛媛県東予煙害史』によると、一色、曾我部、石原実太郎、久門晋太郎の委員および、代議士、夏井保四郎、武市庫太、門田会長、鶴本房五郎理事らが会合し、帝国議会に請願すること、その請願書は前年より簡単にすること、調査要項も表にすること、請願草案は温に委託すること、などを決めた⁴⁷⁾

12月18日、温は愛媛県会に提出する煙害の陳情文を執筆した。この日の日記に「県会ニ提出スヘキ煙害陳情及地租軽減案ヲ草ス」とある。

12月20日の第77回通常県会に被害4郡選出12名の県議名で再度「煙害救済ノ議ニ付陳情」が提出された。それは、前年の第76回通常県会でも決議されたが、今回の建議案は四阪島精錬所の煙害に新たに千原鉦山の煙害を加えて、1. 精錬所の移転、若しくは完全なる除害工事の設備、2. 除害設備の完成まで既往現在の損害の賠償、3. 鉦業法の改正、4. 応急救済のため米麦作開花前後の精錬事業の休止または縮少、を陳情していた。趣旨説明には石原実太郎（越智郡選出、進歩党）が立ち、全会一致で可決され、県会の決議として内務大臣に送られた⁴⁸⁾

以上のように、本年の煙害問題の公文書もまた岡田温が執筆したものであったことが日記から判明する。また、尾道会談における被害農民側の主張も温の損害算定を基礎にして交渉したものであった。煙害問題につき、温の役割甚大なものがある。

⑦明治43年

本年は、伊沢知事の斡旋により、四阪島煙害問題が、妥協的に解決する年である。

46) 愛媛県商工労働部労政課『前掲書』78頁、愛媛県経済部農務課『経過』131頁。

47) 一色耕平『前掲書』52頁、愛媛県経済部農務課『経過』131頁。

48) 『愛媛県議会史』第2巻、1543頁、愛媛県商工労働部労政課『前掲書』86頁。

明治43年1月16日、一色耕平壬生川町長、越智茂登太中川村長が、第26回帝国議会（第2次桂内閣）の貴族院・衆議院に「四阪島煙害救済ノ議ニ付」請願（温が執筆）を提出するために上京した。さらに、1月20日には、県農会の門田晋会長も煙害陳情のため上京した。この日の日記に「門田会長煙害陳情ノタメ上京ス。千原鉦山ノ被害陳情請願書ヲ草シテ会長ニ送ル」とある。議会への請願書は1月25日付けで提出された。請願文は、四阪島精錬場の煙害に関し、昨年も貴院の賛助を得たがいまだ解決せず、また、42年5月尾道で鉦主と直接交渉したが、要領を得なかったとして、再び、貴院のご配慮を仰ぎたいとして、1. 精錬場の移転若しくは完全なる除害工事の設備、2. 除害上設備の完成までは既往現在に於る損害の賠償、3. 鉦業法の改正、4. 応急救済のため、米麦作開花期前後の重要期間に於て製錬事業の休止若しくは縮小、を求めた⁴⁹⁾ この請願は貴族院では2月9日に、衆議院では3月19日に採択された。

5月26日～6月5日、政府の鉦毒調査会の一行（岡田鴻三郎、三成文一郎、伊東一二農商務省技師ら）による煙害地の麦作坪刈が行われ、温も途中から立ち会った。温は30日今治に出張し、翌31日伊東技師一行とともに周桑郡に行き、坪刈の打ち合わせを行い、6月1日、一行10人を2組に分け、石根村、小松町、永見村、橘村、多賀村、吉井村の坪刈に立ち会った。この日、朝6時半に出発し、坪刈を行い、宿に帰ったのが夜7時で、温は「非常ニ疲労ス」と記している。2日は庄内、楠河、三芳村の坪刈、3日は壬生川町、国安村、吉岡村の坪刈、4日は徳田、福岡、周布村の坪刈に立ち会った。煙害の被害甚大であった。この日の日記に「此地方ノ櫨樹大被害アリ。去ル四月十四、五日ニ濃煙多ク来リ、十七日ヨリ晴快ニ逢フテ多クノ枯凋枝ヲ生シ、殊ニ花ヲ有セズ。櫨樹ハ中産以上ノ所有ニシテ救済困難ナリト云フ」と記している。5日は桜樹村の坪刈に立ち会った。5日の日記にも「徳田村ノ小田、福岡村ノ久妙

49) 愛媛県経済部農務課『経過』133～136頁、愛媛県商工労働部労政課『前掲書』101頁。

寺，御陣家附近ハ例年ニナキ劇敷ナリ」とあり，やはり煙害がひどかったことが判明する。

7月中旬，またまた，煙害が起きた。7月15日，温は越智郡の農事講習の予定であったが，周桑郡から煙害の急電があり，翌16日午前4時自宅を出て，5時の汽車に乗り，周桑郡福岡村大字丹原に出張した。9時半丹原に着し，木曾茂作周桑郡農会技手らとともに徳田村，庄内村を視察した。庄内村の煙害は特にひどく，「郡中ノ最被害地ナリ」であった。17日には壬生川町，国安村，三芳村，楠河村を巡視し，丹原に戻った。被害状況は「国安ノ被害尤モ甚シク，三芳ハ例年ノ如ク，楠河ハ稍少ナシ」であった。18日は周布，多賀，吉井村，小松町を巡視した。被害状況は「周布ハ根付キ，多賀ハ福部，吉井広江，小松ハ岡村ノ山林ノ被害多シ」であった。翌19日，温は早朝周桑郡を出発し，帰松した。

なお，この7月19日に，周桑郡の煙害激甚，惨状を極めたため，被害農民2,000人が丹原に大会を開き，そして，愛媛県内務部長岡田宇之助が越智郡より周桑郡に視察に来るのを知り，周桑郡の被害農民数千人が「町村長よりなる煙害調査会では解決の目途が立たない」として岡田内務部長に直接陳情せんと大明神河原に集合した。しかし，内務部長は農民大衆を解散させない限り，煙害視察は行わないと通告し，一色耕平ら煙害調査委員は農民を鎮撫し解散させている⁵⁰⁾。

そして，7月23日に周桑郡11ヵ町村長（一色耕平壬生川町長ら）が農商務大臣・小松原英太郎に「煙害解決ノ議ニ付上申」を提出している⁵¹⁾。この陳情文は温が執筆したかどうかは不明。

8月15日，伊沢多喜男知事は，農商務省と打ち合わせの上，煙害問題の調停に乗り出した。東予4郡々長を集め，四阪島煙害の解決策について協議し，そして，8月22日に伊沢は四阪島煙害賠償交渉の覚書（調停案）を示した。

50) 愛媛県商工労働部労政課『前掲書』107頁。

51) 同，108頁。

そのおもな内容は、1. 煙害代表者選出の準備を為す。2. 代表者、越智5名、周桑3名、新居1名、宇摩1名とする。3. 代表者を選出すべき町村は農商務省の調査に依り被害地と認められた町村に限る。4. 代表者は被害農民より予め左の権限及承諾を受くる事。(イ) 委任条件は無条件たる事、(ロ) 賠償金算出の基礎は農商務省の調査に準拠する事、(ハ) 前項の調査標準を基礎とし協議を重ねるも意見の一致を欠く場合はすべての協定条件は農商務大臣又は知事のご指定を仰ぎ異議を唱へざること、(ニ) 賠償金は農民各自に分配を分けず、農事改良費に充用する事、(ホ) 従来及び今後とも運動に要する費用は賠償金の中から支出せざる事、であった⁵²⁾

この調停案を受け、8月下旬、東予の各郡の農民は関係町村における協議会を開いて検討を加えた。

9月2日に越智郡煙害委員会が日吉村南光坊において開催され、知事の覚書・調停案を協議した。立花村の内鳥生部落の約100余名は「絶対に覚書に反対すべし」との強硬意見を主張し、議場がしばしば騒然となったが、「大勢は知事官邸における覚書に賛意を表せるものの如し」と受け入れた⁵³⁾

9月5日に周桑郡の煙害調査会が周桑郡役所にて開かれ、覚書を協議した。この時の協議内容は一色耕平の『前掲書』に何故か書かれておらず、不明であるが、翌6日、周桑郡三芳村長渡辺静一郎、国安村長越智多作が、越智郡桜井村長曾我部右吉を往訪し、協議の上、調査会長一色耕平に「一、知事四郡長按は忍んで承認すること、二、妥協委員に希望として既往解決は勿論将来の契約期は三年を過ぎざる事、政府は鉦主に対し、完全なる除害方法を命ずる事、稲麦生育及び開花の緊急時期に於て生鉦の焼鉦中止若しくは減量を断行する事」を報告しているので、周桑郡も知事の調停を「忍んで」受け入れた⁵⁴⁾

そして、10月5日に伊沢知事は東予四郡の農民代表者（越智郡農民代表曾

52) 一色耕平『前掲書』61～62頁、愛媛県商工労働部労政課『前掲書』109～110頁。木本『前掲書』148～151頁。

53) 愛媛県商工労働部労政課『前掲書』112頁。

54) 一色『前掲書』63頁。

我部右吉、石原実太郎、真鍋周三郎、野間米一、上田実五郎、周桑郡農民代表一色耕平、青野岩平、渡辺静一郎、新居郡農民代表久保寅吉、宇摩郡農民代表近藤喜三郎)を県庁に集め、覚書を協議した。農民代表者側はいくつかの希望条件をつけたが、「覚書全部承認」した⁵⁵⁾。住友側もこれに応じたので、伊沢は両者の意見を取りまとめて、大浦兼武農商務大臣に報告し、大臣自らの視察を要請した。

大浦農相は10月13日、14日越智、周桑の煙害地の視察を行った。

10月22日、一色耕平、曾我部右吉ら被害農民代表が上京し、23日に着京した。24日夜、農相官邸にて、大浦農相の招待会があり、大浦は「農業・鉱業共に之を併行せしめて、益々産額の増進を企図すること」、「今回妥協に関しては敢えて本省は干与せざるを以て、諸君の自由意志に依り…円満に熟議を経て協定せられんことを望む」と訓示した⁵⁶⁾。この大浦の農鉱併行論であるが、それは建前であった。

10月25日から農商務省官邸にて、伊沢知事を座長に煙害賠償契約協議会が開催された。住友側は総理事の鈴木馬左也、中田錦吉、久保無二雄、被害農民側は一色耕平、曾我部右吉、青野岩平、上田実五郎、石原実太郎らが出席した。

まず、煙害被害の資料をめぐるやり取りがあった。被害者側は農商務省の調査資料を要求したのに対し、住友側は否定し、農鉱両者がそれぞれの調査による資料を出し合い、協議すべきだとして、紛糾したが、27日に伊沢の判断で農商務省側の被害調査の資料(明治41年～43年)が提出された。そして、28日から政府資料への質疑がなされ、古在由直農事試験場長が答弁し、30日に一応終わり、31日に被害農民、住友の双方が損害賠償額を提示した⁵⁷⁾。

農商務省調査と農鉱双方が提示した米麦の煙害被害高は表3の如くである。

55) 一色『前掲書』64～66頁、木本『前掲書』154頁。

56) 一色『前掲書』175～176頁。

57) 木本『前掲書』161～171頁。被害者農民側は農商務省の調査資料が出て、「こちらの調べとは一桁違う」とあっと息を呑んだという(木本著、170頁)。

表3 煙害被害の米麦高における農商務省、被害農民、住友側調査（単位、石）

		農商務省側	被害農民側	住友側	住友提案
明治38年	米 麦	調査ナシ 調査ナシ	9,088 1万1,988	無害 無害	無害 無害
明治39年	米 麦	調査ナシ 調査ナシ	1万5,829 1万2,619	殆ど無害 殆ど無害	推定 471 推定 622
明治40年	米 麦	調査ナシ 調査ナシ	1万5,489 1万1,735	殆ど無害 殆ど無害	推定 471 推定 622
明治41年	米 麦	3,901 推定 2,529	1万6,786 1万4,460	1,056 276	2,953 811
明治42年	米 麦	1,172 5,057	8,680 1万6,220	92 1,260	812 3,791
明治43年	米 麦	調査未完了 3,786	未定 1万5,510	推定 574 991	推定 1,883 2,858
平均	米 麦	2,536.5 4,421	1万3,177 1万3,755	574 842	1,883 2,487

（出典）一色耕平『愛媛県東予煙害史』177～192頁より作成。

（注）平均は、筆者計算。

被害農民側は、温が作成した『四阪島煙害調査要項』をもとに、明治38年～43年にかけて、表3のような損害高を示し、それに、米麦価格を掛けて、その損害賠償額は149万5,531円70銭を当初計上したが、もともと、「賠償金算出の基礎は農商務省の調査に準拠する」と伊沢知事との『覚書』をかわしていたので、「以上の計算を一大軽減して」次のような計算方法で、損害賠償額を算出し直した。すなわち、米は農商務省調査の明治41年と42年の平均2,536石5斗、麦は42年と43年の平均の4,421石を採用し、それに米麦価（米1石13円77銭5厘、麦1石8円57銭3厘）を掛け、野菜果樹被害額を加え、その総額に間接被害3割の割増金を加算し、6年分を乗じ、総額を出し、更に金利6年分を加算し農産物被害総額を算出し、それに山林被害額を加算して、総計70万9,651円を要求した。なお、間接被害3割増の理由として、煙害に因る種々の損失（労力不足、意気阻喪、産業奨励の阻害、地代の下落、地主小作の不調和、被害軽減の為の肥料増投による損失）を挙げた⁵⁸⁾被害農

民側が、米麦被害高を農商務省調査に準拠したことは、温が試算した被害高に比して、米はわずか19.2%、麦は32.1%にすぎず、大幅な譲歩であった。

住友側の調査は、米の場合、明治38年は無害、39、40年も殆ど無害、41年は1,056石、42年は92石、43年は（推定）574石（41年と42年の平均）というもので、被害農民側の調査と天と地ほど差異があった。ただ、住友側は気が引けたのか、提案として、明治38年は無害だが、39・40年は農商務調査の41年を半減し、2で除し、41、42年は農商務省調査を2とし、住友調査1とし、3で除し、43年の米は未調査だが、41、42年の平均をもとに、41、42年と同様の計算方法によったものであった。この住友提案は、明治38年が無害というひどい提案であり、また、39年以降も農商務省調査を一部利用していたが、恣意的で、アバウトな計算であった。住友の賠償金額は当初、既往3年余は2万3,076円（1年平均7,692円）、将来の1ヵ年間はその3分の1と見積もって7,692円を主張し、⁵⁸⁾その後、住友提案は農商務省の調査も考慮して、既往6年間を17万3,007円、将来3年間を14万9,844円と提案した。住友の賠償額は、被害農民側の既往6年分で4分の1、将来3年分で2分の1以下であった。

被害農民側と住友側の損害高・額の差異は余りにも大きかった。したがって、妥協はなされなかった。11月8日には、「論争決せず、行き悩み双方無言にて三十分徒消」⁶⁰⁾という有様であった。そこで、結局、大浦農相の裁定を仰ぐことになった。

11月9日、大浦農相は損害額の算定については、農商務省の調査を採用し、明治41年から43年の3ヵ年の米麦山林の損害額を23万9,000円（1年平均7万9,700円）と算定した。算定根拠は農商務省調査の平均被害高の米2,536.5石、麦を4,421石に米麦価を掛け、そして、野菜、山林被害をプラス

58) 一色『前掲書』185～187頁。

59) 住友本社『前掲書』473頁。

60) 一色『前掲書』194頁。

したものであった。将来の3年分は前記3年分の平均額をもって毎年7万7,000円と裁定した。そして、明治38年から40年の3年間については、賠償の意味をもって、住友に10万円（1年平均3万3,333円）を支払うよう命じた。

被害農民側の賠償額の要求、住友側の提案額、大臣裁定額を一色耕平が表にまとめているが、それは次の通りで、大臣裁定額は、既往6年は、被害農民側の譲歩した要求額の半分以下、将来分をあわせて、約半分以上を上回る程度にとどまった。

表4 被害農民側の賠償額の要求、住友側の提案額、大臣裁定額

区分	被害農民要求額	住友提案	大臣裁定
明治38～43年	70万9,656円12銭8厘	17万3,007円	38年～40年 10万円 41年～43年 23万9,000円
明治44～46年	33万8,685円13銭2厘	14万9,844円	23万1,000円
合計	104万8,341円26銭	32万2,851円58銭6厘	57万円

（出典）一色耕平『愛媛東予煙害史』194頁。

次に鉱量制限について。被害農民側は明治42年の焼鉱量に応じて1ヵ年焼鉱量5,300万貫とすること、米麦作重要期間中、各30日間は焼鉱量を半減すること、契約期間は3ヵ年を主張した。他方、住友側は鉱量は基本的に無制限だが、1ヵ年6,000万貫を極度とすること、米麦作の重要期間は1日の鉱量を10万貫に減ずること、契約期間は5ヵ年等を主張し、対立が続いた。

結局、この鉱量制限についても裁定がなされた。こちらは大浦農相ではなく、伊沢知事が裁定し、1ヵ年の焼鉱量は5,500万貫とする、米麦作重要期間は、農民側の半減は不可能と退け、1日製錬量10万貫として住友の提案を容れたが、米麦の重要期間を40日間に延長し、そのうち10日間は精錬停止とした。そして、契約期間は3年を裁定した⁶¹⁾。この鉱量制限について、後に、伝記『伊沢多喜男』は「双方の主張する鉱量制限についても、鉱山側は無制限を原則とすることを主張したので、協定困難に陥り、結局大臣の裁定を仰ぐこととなったが、大臣はこの重大性と責任の及ぶことを考えてこれを拒否した。

この時、翁（注：伊沢）はこの裁定を自己一身の責任で引き受け、1ヵ年5,500万貫と裁定した。この裁定が双方妥協を見たのは、全く、翁が両者、特に農民側から深い信頼をもたれたからだ」と自画自賛している。⁶²⁾

これらの農相・知事裁定に対し、被害農民側も、住友側も「異議を唱えない」と誓約していたため、不満だが、双方とも受け入れた。

11月9日、賠償金額と支払い方法、精錬所の鉱量、契約期間などの大臣裁定を双方が承認し、11月11日契約書の調印が行われた。契約の全文を掲げれば次の通りである。⁶³⁾

「 契 約 書

愛媛県四坂島製錬書煙害事件ニ付鉱業権者住友吉左衛門ヲ甲トシ愛媛県越智、周桑、新居、宇摩ノ四郡内ニ於ケル被害者ヲ乙トシ甲ノ代理人鈴木馬左也ト乙ノ代表者曾我部右吉、石原実太郎、真鍋周三郎、野間米市、上田実五郎、青野岩平、一色耕平、渡辺静一郎、久保寅吉、及び近藤喜三郎ト契約スルコト左ノ如シ

第一条 農作物林木ニ対スル損害ヲ賠償スル為メ甲ハ乙ニ対シ、明治四十一年一月一日（林木ニ付テハ同四十年一月一日）ヨリ四十三年十二月三十一ニ至ル迄ノ分トシテ金貳拾参万九千円ヲ支払ヒ四十四年以後ハ毎年金七万七千円ヲ支払フモノトス

61) 愛媛県商工労働部労政課『前掲書』122頁。木本『前掲書』は鉱量制限について、大浦は「工業は発達せしめねばならぬ、貿易は振興せしめねばならぬ、そのためには銅の生産は幾らでも必要だ。焼鉱量の制限などほもつてのほかである」と反対したが、伊沢知事が、「焼鉱量が無限に殖えれば、煙害もまた無限に広がります。亜硫酸ガスの排除に適切な技術が開発されない以上、焼鉱量の野放しは絶対に認められません。…この一点が認められなければ、僕は知事を辞任する」と譲らず、結局大浦が折れて伊沢の裁定通りとなった、と述べている（木本著、178～179頁）。この大浦の弁は、「農鉱併行論」の訓示と全く齟齬している。

62) 伊沢多喜男伝記編纂委員会『伊沢多喜男』昭和26年、90頁。

63) 一色耕平『前掲書』195～198頁、『愛媛県史 資料編』近代3、589頁、愛媛県商工労働部労政課『前掲書』120～121頁。

右賠償金ノ外甲ハ乙ニ対シ別ニ金拾万円ヲ出金シ前項以外ノ既往ノ損害ヲ賠償スルノ意ヲ表スルモノトス

前二項ニ掲ゲル賠償金及ヒ出金ノ支払時期及ヒ授受ノ方法等ハ熟議ノ上別ニ之ヲ協定スベシ

第二条 四坂島製鍊所ニ於ケル一ケ年ノ製鍊鉍量ハ五千五百万貫ヲ以テ最高限度トス

第三条 将来鉍煙除害ノ実施硫酸ノ製造等ニ依リ亜硫酸瓦斯ノ発生ヲ減少スルニ至リタルトキハ前条ニ拘ハラズ甲ハ亜硫酸瓦斯ノ減少歩合ニ応ジ製鍊鉍量ヲ増加スルコトヲ得（但第二条ノ亜硫酸瓦斯含有量ヲ超過セザル鉍石ニ限ル）

前項ノ場合ニ於テ生産鉍量ヲ増加セサルトキハ亜硫酸瓦斯ノ減少歩合ニ応ジ所定ノ賠償金額ヲ通減スルモノトス

第四条 天災事変其ノ他ノ事由ニ依リ六ヶ月以上継続シテ製鍊事業ノ全部又ハ一部ヲ中止又ハ停止テ為ニ一ケ年ニ於ケル製鍊総鉍量ノ五分の一以上ヲ減少スルニ至リタルトキハ其減少歩合ニ応ジ所定ノ賠償金額ヲ通減スルモノトス

第五条 米作及麦作ノ重要時期ニ於テ各四十日間甲ハ一日ノ製鍊鉍量ヲ拾万貫ニ減少スルモノトス

右期間内ニ於テ甲ハ各十日間溶鉍炉ノ作業ヲ全部休止スルモノトス

前二項ノ期間開始及ヒ終了ノ時期ニ付テハ熟議ノ上別ニ之ヲ協定スベシ

第六条 本契約ノ有効期間ハ本契約ノ締結ノ日より明治四十六年十二月三十一日ニ至ル迄トス

本契約ノ成立ヲ證スル為メ契約書二通ヲ作り各自一通ヲ領置スルモノトス
明治四十三年十一月九日

住友吉左衛門代理人

鈴木馬左也

越智周桑新居宇摩四郡被害者代表者

曾我部右吉

石原実太郎
真鍋周三郎
野間 米市
上田実五郎
青野 岩平
一色 耕平
渡辺静一郎
久保 寅吉
近藤喜三郎

お わ り に

以上、明治38年以来、愛媛県東予地方の大問題であった四阪島煙害問題が一応妥協的に「解決」した。それは、長年にわたる被害農民の煙害反対運動の成果であった。

そして、その中で、被害農民に「満腔の同情」をもって、尽力してきた岡田温の果たした役割は極めて甚大であったといえよう。再度、まとめれば、明治39年11月『煙害調査書』、40年9月の「愛媛県鉍毒調査会」の報告書の執筆、41年7月の周桑郡町村長の農商務大臣あての建議案の執筆、41年9月愛媛県選出代議士への現地視察の要請、41年12月愛媛県会での「煙害救済ノ議」の決議案の執筆、42年1月の第25帝国議会における煙害救済の建議案の執筆、その参考資料の『煙害調査要項』の執筆、42年4月尾道会談における被害農民側の損害賠償額の算定、42年12月の愛媛県会での再度の煙害救済決議案の執筆、43年1月の第26帝国議会における煙害救済の再度の建議案の執筆、43年10月農商務省官邸での住友との協議における被害額の算定、等々。また、温は被害地から煙害襲来・調査の要請があれば、そのたびに出張し調査を行い、また、明治41年からの農商務省の煙害地の坪刈に際し、立会うなど、献身的に職務をこなした。温の支えなくしては、四阪島煙害問題の解決は不可能で

あったとまで言うことが出来よう。

さて、温が尽力したこの四阪島煙害問題の妥協的「解決」「裁定」をどう評価するかである。妥協だから双方に不満が残ったことは言うまでもない。被害農民側は賠償金額で大いなる不満が残り、住友側には鉦量制限で大いなる不満が残った。当事者たちも、従来の研究史でも、両者の痛み分け、妥協的解決といった評価である。しかし、「はじめに」で指摘したように、一步踏み込んで、どちらがより多く譲歩を強いられたかを深く追求する点が欠けていたように思う。やはり、今回の妥協で大いなる譲歩を強いられたのは被害農民側ではないか。以下、その論拠をのべよう。

まず、賠償金額について。被害農民側は、当初、温の計算式に基づいて、既往6年間（明治38～43年）は149万5,531円と算出していたが、被害農民の代表者たちは一大譲歩し、「軽減」し、農商務省調査に基づき、算定し直し、間接被害3割増しと金利加算を求めて、70万9,651円を要求した。しかし、それも受け入れられず、大浦農相の裁定は明治41年～43年が23万9,000円で、38年～40年が10万円で、合計33万9,000円にすぎず、被害農民の当初要求の22.7%であり、譲歩額に照らしても47.8%、2分の1に届かなかった。とくに、農商務省の調査のない、明治38年から40年の3カ年間はわずか10万円に値切られた。この10万円は全く恣意的な数字であった。もし、農商務省の調査がないなら、せめて、41～42年の調査を援用して適用すべきであったが、大浦農相は住友に配慮して値切ったとしか考えられない（ここでも大浦の農鉦併行論の齟齬がある）。だから、妥協的解決といっても賠償金額で被害農民側は大幅に譲歩を強いられたといえよう。そして、それに対し被害農民側の代表たちは異を唱えられなかった。

鉦量制限について。住友側は後に、「農民側は兎に角、率直にいへば鉦業所にとってかような契約は、実に我が国はおろか世界にもその例を見ざる過重の負担であり、且つ操業上苛烈なる桎梏を科せられたものであった」と大いに不満を述べている⁶⁴⁾。確かに、自由に生産を拡大したい住友から見れば、鉦量

制限は「負担」「桎梏」であるが、この言い分も割り引いて見る必要がある。というのは、四阪島精錬所の焼鉍量の実績は、明治38年2,621万貫、39年4,184万貫、40年4,751万貫、42年5,348万貫、43年で5,300万貫で⁶⁵⁾、いずれも5,500万貫以内にとどまっており、伊沢知事は鉍量削減までは裁定しなかったのである。また、米麦作の重要時期における鉍量制限についても、被害農民側は半減を主張したが、伊沢知事はそれを却下し、住友の要求どおり1日10万貫を認めたからである。だから、鉍量制限でも、住友側が大幅に譲歩したとはいえず、その後の3年ごとの煙害賠償交渉で、年間最高鉍量は上げられている。例えば、大正2年が7,000万貫、5年が8,500万貫、8年が9,600万貫、等々である⁶⁶⁾被害農民側には引き続き、煙害が続いた。煙害賠償問題は妥協的「解決」したが、煙害は無くならなかったのである。なお、最終的に煙害が無くなるのは、昭和14年中和工場が完成してからである。

何故、賠償額にせよ、鉍量制限にせよ、被害農民側に大幅に不利な結果になったのか。それは、被害農民側の代表・町村長側が、住友側と意見の一致が出来ない場合、農商務大臣や伊沢の調停を仰ぎ、その裁定に「異議ヲ唱ヘザルコト」とはじめてから誓約させられたことが最大の要因であったと思う。それは、伊沢の巧緻な戦略であり、それに町村長側が乗せられた結果である。そして、町村長たちは、知事の裁定に逆らえなかったからである。そこに町村長たちに依存した運動の限界があったように思う。

また、賠償金の支出に関する評価である。伊沢知事は、賠償金を農民個人に配分せず、農事改良費に充用するとし、実際おおむねそのように支出された⁶⁷⁾それを高く評価している論者は多い。「はじめに」の箇所でも引用した宮本憲一氏もそうであった。だが、この点については慎重に評価する必要がある。煙

64) 住友本社『前掲書』476頁。

65) 一色『前掲書』182頁。

66) 新居浜市『新居浜産業経済史』昭和48年、195頁。

67) 伊沢は「賠償金は一部の野心家に食い荒らされてはならん。また、濫費されてはならん」と述べ、個人への配分を否定した(木本『前掲書』186頁)。

害の被害は農作物、山林だけではない。健康被害、出産被害も発生しているからである。

愛媛出身の新聞記者高橋秀臣⁶⁸⁾は、『愛媛新報』に「大浦農相と煙害問題（上）、（下）」（明治43年10月11、12日付け）の記事を投稿している。高橋は、煙害によりもたらされる16の大損害（米麦蔬菜、山林、畜産、養蚕、果樹、漁業、染物、人体の健康、地価下落、物産下落、無用の失費、学理の普及を妨げる、病害誘致、地主小作の不和、商工業の発達を妨げる、硫酸銅の飛下による土壌の悪化）をあげ、特に人体への健康被害、流産の多発を糾弾する。

「政府及県庁の官僚諸氏は、煙害と謂へば、唯田畑山林の作物のみ害を与ふるものとして此の田畑山林以外のものに及ぼす害の極めて大なるものあることを究むるをなさず。…夫の煙害が人の身体上に及ぼす害の如きは、当局の最も注意留意して調査をなさざるべからざるものあるに拘はらず、之を忽になしある如きは、実に奇怪千万の事たるを失はず。現に余が昨年迄に調査したる所に依れば、今治町役場の所管にて、煙害の来らざりし明治三十七年以前と煙害の来りし三十八年後との死亡に対する死産率を調査するに、今治町丈にて、煙害前は死産率が死亡人数の七八分なりしに、煙害後は其率増加して一割三分内外となり居るに鑑みても、煙害地に死産者の多きを知るに足る。煙害地に死産の多き理由は空气中に亜硫酸瓦斯混入する時は空気極めて不潔のものとなるを以て妊娠中の婦人が此空気を呼吸するに際し、其不潔の気が母体の血に交じりて之を胎児に送るに当りて胎児は此の悪血に依りて栄養受くること能はずして臨月までを保つこと能はずして中途に死して生まるゝが、之れ流産即死産の原因をなすものにして、今治町に多きは、蓋し此れが為なるべし」と。

だから、賠償金はもちろん「野心家に食い荒らされ」たり、「濫費」されてはならないが、煙害農民は、単に農産物被害だけでなく、健康被害をも受けて

68) 元治元年（1864）4月、西条藩奉行同心高橋林三郎の長男に生まれる。小学校卒業後、上京。壮士として、政治運動に従事。苦学して明治32年35歳で明治法律学校を卒業。新聞記者となり、政治評論に健筆を振るう。足尾鉾毒事件で田中正造を支援する論陣をはった。後、45年5月の衆議院選挙に国民党から立候補したが、落選。

いるのであり、その生活苦は甚大なものであり、また、感情からいっても賠償金が個人に配分・補償されなかった点に問題が残ったといえるのではないか。ここでも、町村長側の対応に問題があったのではないか⁶⁹⁾

最後に、岡田温自身は、この妥協的解決についてどう評価しているか？『愛媛県農会報』の105号（明治43年12月）に、11月9日の契約書を記し、短く論評している。その短文は間違いなく温の執筆と思われる。それによると、明治38年以来紛擾に紛擾を重ねたる四阪島煙害問題が「一段落を告げたことは、兎も角も県下の一慶事なり」として歓迎している。ただ、「根本的解決にあらずして短期間に於ける焦眉の救済」に過ぎないこと、且つ「本問題の性質上、双方満足なる解決は殆ど不可能」と述べ、前記条件を見ると、「被害民側よりせば尚甚だ不満足なるべきも、鉦主側に於いても近年銅価不況の際なれば相当苦痛」でないかと、双方とも不利不満でないかと言ひ、被害農民に対し、今後「被害民は忍ぶべからざるをも忍んで、此の上は各自の勉励を以て被害軽減の栽培法に全力を注ぐを要す」と述べている⁷⁰⁾

さらに、『愛媛県農会報』の107号（明治44年2月）に、温は「四阪島煙害

69) 明治44年2月9日に、伊沢は被害農民代表を県庁に集め、賠償金処分方法についてかねての諮問に対する各郡の回答を聞いた。周桑郡（一色耕平）は産業組合に出資して、貸付、農業振興にあてる、越智郡（石原実太郎）は銀行を創設し、農業振興にあてる、新居郡（久保寅吉）は道路か、農事振興にあてる、宇摩郡（近藤喜三郎）は知事に一任、であった。結果は、知事に一任となった（一色『前掲書』68～69頁）。その模様を木本『前掲書』は次のように描写している。「きょうは賠償金の処分方法について、かねて諮問してあった諸君の意見を聞く。賠償金を個々人に直接渡さないのは、かねての僕の方針である。また、住友側の希望でもある。さて、諸君はどのような具体的方法を考えているか」と問い、各郡から先のような回答を聞き、その上で、伊沢は「よし、諸君の考えは大体分かった。…その前に相談があるが、…賠償金のうち、五千元だけは僕にくれんか」と言ったが、それに対し、町村長側は「それはもう」「どうぞどうぞ」「長官が必要でしたら…幾らでも」と代表者たちは誰にも遅れまいと、口々に答えたと言う。さらに、伊沢は「賠償金の一部の野心家に食い荒らされてはならん。また、濫費されてはならん。諸君の考えはよく判ったから、具体案は僕に一任してもらう」と言ったが、それに対し、町村長側は「はあ、どうぞよろしく、万事ご一任いたします」と口々に答えたという（木本著、185～186頁）。もちろん、これは小説で多分に創作があるが、賠償金の処分方法が伊沢の方針によって決定されたことは間違いない。町村長側は一切異を唱えなかったようだ。

70) 「四阪島煙害事件の一段落」『愛媛県農会報』105号、明治43年12月。

被害者諸君に望む」と題し、さらに詳細に論じている。少し長いが引用しよう。

「去る三十八年以来、県下の大問題、実は天下の大問題となれる、四坂島の煙害事件は、公明正大なる形式により、円満なる解決の端緒を開きたり。今の場合に円満なる解決などとは聊か早計に過ぎ、彼の条件についても、被害諸君は尚不満を感じらるるならんも、各方面より視察考慮せば何れに得失あるやは俄に談じ難し。少しく不穏当なる文字なれども、双方の得失を仮に勝敗の二字を以て表示するとして、被害者の勝とは製錬事業を停止せしめ、全く鉾煙の跡を絶ちたる時の事なり。毒煙の来襲する間は、たとひ相当の賠償ありとも被害者の勝とはいひ難し。況や其賠償も被害の実量を償ひ、精神上の苦悶を除去するには尚甚だ不足なるが如く感ぜらるるに於てをや。

然らば鉾主の勝と視るべきか、鉾主の勝とは法律命令の範囲の下に自由任意に経営し、敢て他の掣肘を受けず、必要なる生産費の外には何等の支出を要せざるが如く処決されたる場合の事なり。近年銅価不況引き続き、小鉾山は収支相償わざるもの多きが如し。住友の大資本と二百年來の歴史と新式の器械とにより、事業経営に何等の影響なきが視ゆるならんも、此場合に数十万の賠償金を支出し、事業に種々の制限を付せられたるが如きは、住友家の鉾業部としては相当の苦痛なるべく、従つて鉾主の勝とも言ひ難し。鉾主も被害者も共に不利不満なりとせば、寧ろ兩損兩敗と称するの至当ならんか。其他解決の衝に当られたる委員諸君及多年調査に従事されたる技術諸君は極めて不愉快の裡に非常の苦心と熱誠を以て事に当られながら、尚ほ鉾主よりも被害者よりも、衷心感謝せられざるやも知れず、委員諸氏の如きは或いは一層怨言を浴せらるゝやも図られざるべし。

斯の如く多くの人の苦心斡旋の結果が、何れの方面にも感謝喝采を以て迎へられず、四方八方盡く不満足なるが如き処決が、此種の事件として円満なる解決方法と言ふも可なるべく、双方ともに此精神を以て進行せば、今回を端緒に真に円満に解決せらるべき望みあり。

最も鉾主は天下の富豪にして、且つ其受くる打撃は積極的なれ共、被害者の

多数は農村の細民にして、且つ其損害は消極的なるが故に、鉦主は被害民に比し、遙かに忍び易き道理なり。殊に徳義人道上より論及するときは、被害者に何等の過失あるにあらず、天災地変の避くべからざる災厄にもあらずして、他の営利事業のために其職業上に損害苦痛を受くるが如きは、責任の帰する処洵に明らかなれば、被害者は左程に多きを忍ぶの要なき道理なれども、複雑なる文明社会の職業上の衝突は、単に道德上の論断ばかりにても解決し得られざる問題なれば、不満足の状態にても、或る程度までは忍ばざるべからず、よし忍ぶべからざると仮定するも、来る四十六年までは苦痛を言ふべからざる約束あれば、若しも其期間に兎角の苦痛の起こるが如き事ありては、信を天下に失し、事態愈困難となるに至るべし。されば来る四十六年までは従来態度を一変し、栽培管理の注意改良によって、被害の軽減を図るを肝要とす。

日露戦役以来は、県下の農事の長足の進歩をなしたる時代なりしが、東予地方は不幸にも、其当時より煙害を蒙り、技術者は総て敵視せられ、学理の普及殆ど中絶の状態となり、為に従来稲作に巧みなる県内第一と称せられたる越智郡の如きも、今や第三流に下れり。其大原因は煙害にありしならんも、一切万事を煙害に帰し時勢相当の改良を行はざりしも亦其一因をなせるが如し。

余輩は煙害の如き農業上至大の障害問題の、有耶無耶の間にさまよひ、茫々として如何に成り行くやの不明なる間は、安んじて事業の改良を図り得る者にあらざる事を確信せるが故に、煙害発生当初は、種々の方面より多少の批難は承知しながら、自己の本職たる改良奨励の任務を放棄し、満腔の同情を以て煙害解決の端緒を開かんため、区々の微力を致したるも、今は転じて諸君に勧むるに、しばらく口を緘して専心技術の改良に努められんことを以てす。是れ吾輩の諸君に対し最も忠実なる行動と信ずるが故なり。念ふに来る四十六年には、再び談判交渉の開かるるならんが、其条件は今より集蒐準備せざるべからず。然れ共其材料中、学術上の研究調査は、主務省を初め是れに当るべき種々の機関あれば益最新の方法を以て講究せらるべきを以て諸君は一意専心、栽培法の改良、病中害の駆除予防法を励行し、可及的煙害と混同せる種々の障害

を少なくし、学者をして諸君の行為を攻撃するの余地なからしむるに至れば、次回の談判には非常に有利有力なる条件の好材料を得べし。多年の例によれば鉦来の煙襲期は目前に近づきたるが、其際諸君の行動の如何は前途の解決に至大の関係あらんと信ずるが故に赤心を披瀝し前言を勧む」。

このように、温は今回の妥協的解決を「両損両敗」とみなし、被害農民に対し、不利不満だが、或る程度は忍んで、今後は一変し、農事改良に専念するよう望んだ。この文章は技師としての本職をなげうって、煙害反対運動に尽力してきた温の率直な気持・赤心を表明したものといえよう。